

Ⅲ 調査結果

1 第1回アンケートの調査結果

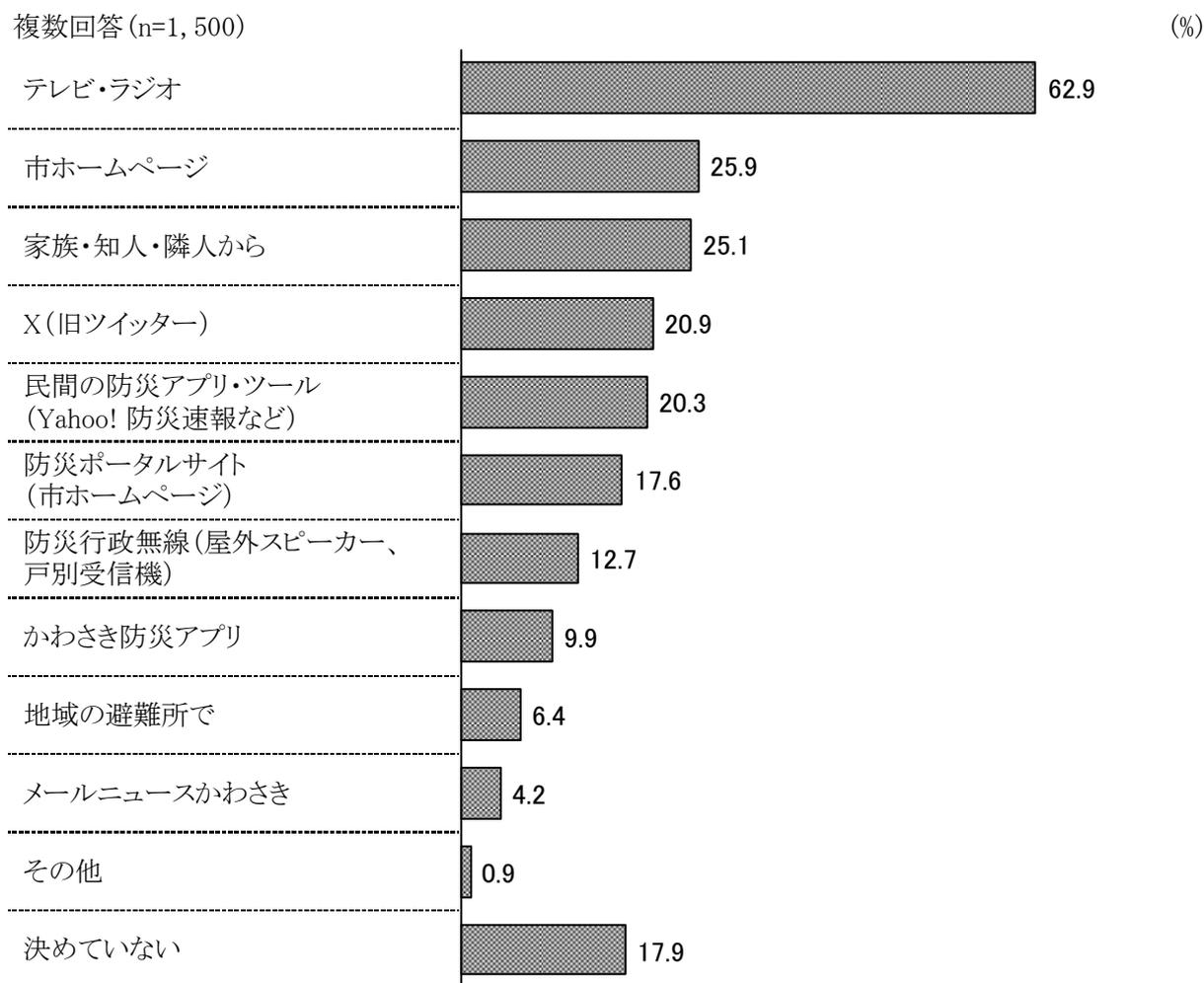
1.1 災害に対する備えについて

(1) 災害時の情報入手手段

Q 1. 災害時、必要となる情報をどのような手段で入手しますか。

「テレビ・ラジオ」が62.9%と最も高く、次いで「市ホームページ」(25.9%)、「家族・知人・隣人から」(25.1%)、「X(旧ツイッター)」(20.9%)、「民間の防災アプリ・ツール(Yahoo!防災速報など)」(20.3%)までが2割以上となっている。一方、「決めていない」は17.9%であった。

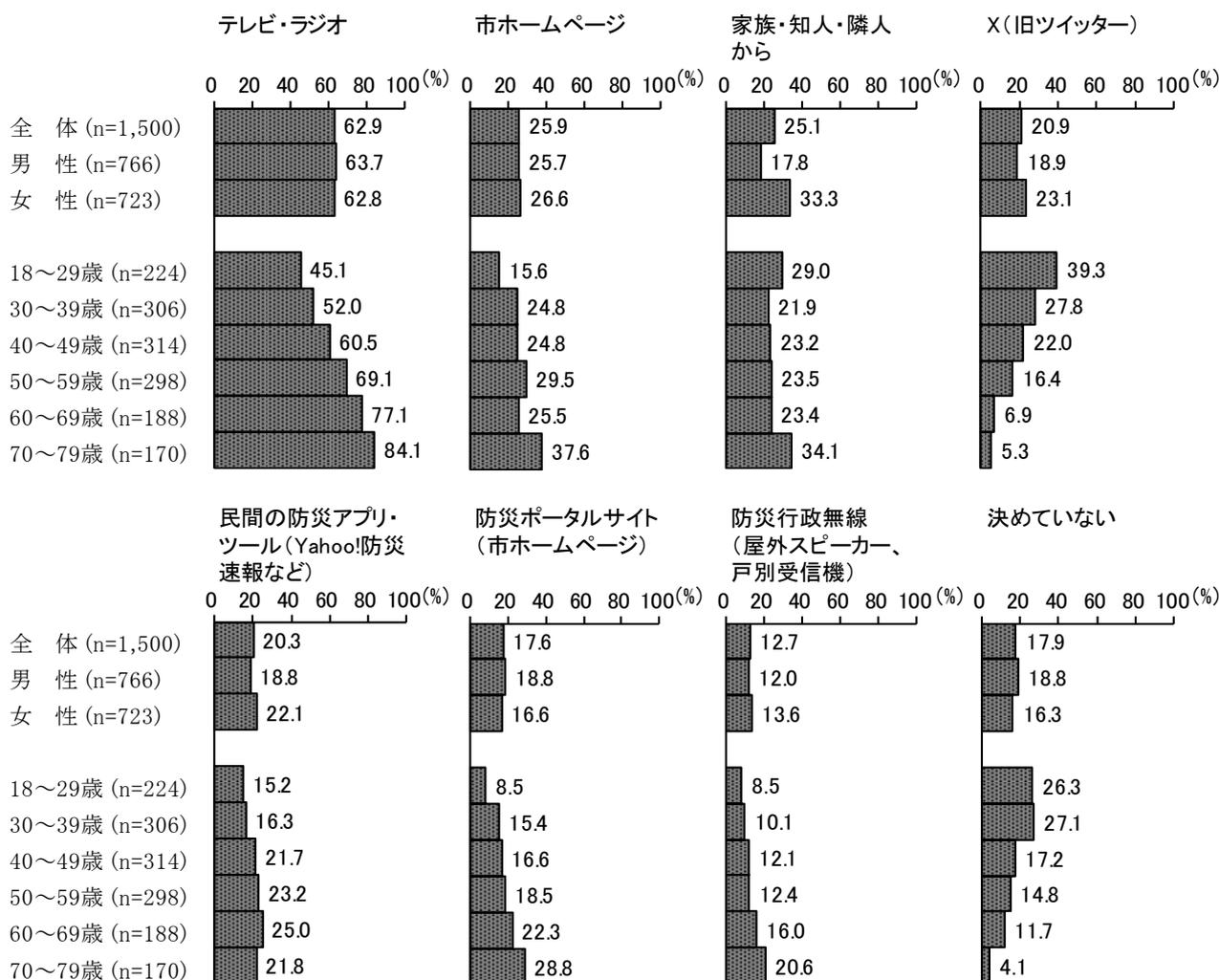
【図表 1】災害時の情報入手手段（複数回答）



性別に見ると、「家族・知人・隣人から」の割合は、男性よりも女性の方が 15.5 ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、「テレビ・ラジオ」、「市ホームページ」、「防災ポータルサイト（市ホームページ）」は概ね年齢が上がるほど高く、「X（旧ツイッター）」は概ね年齢が下がるほど高くなっている。

【図表 2】 災害時の情報入手手段（複数回答）《上位 8 項目》
（性別、年齢別）



(2) 地震に関し、家庭で行っている備え

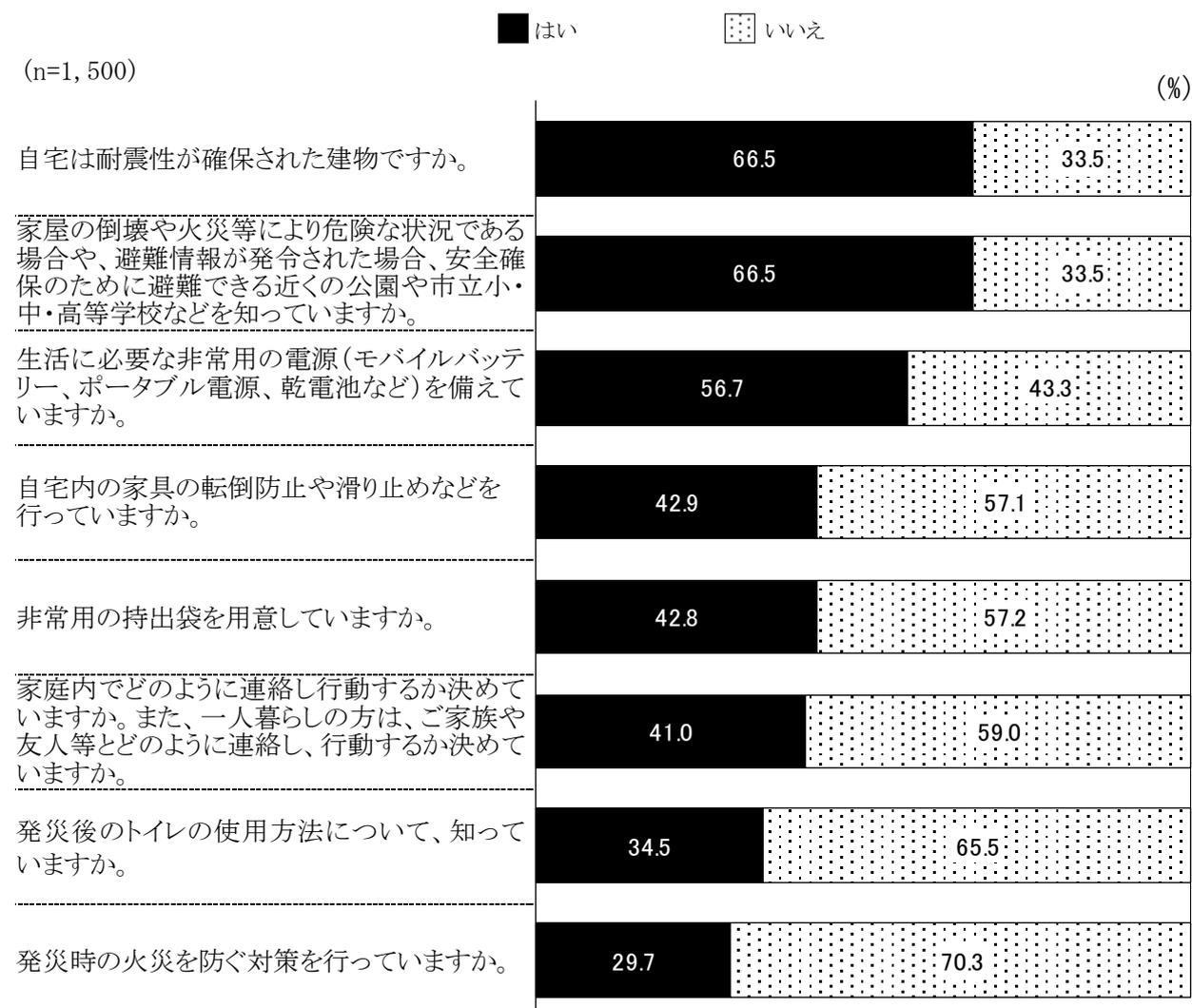
Q2. 地震に関し、あなたが行っている家庭での備えについてうかがいます。項目ごとにあてはまるものを選んでください。

【この設問では、地震による以下の被害状況を想定しています】

- ・大規模な地震であり、お住いの地域では一部木造住宅の倒壊や火災などが発生。
- ・自宅は無事で生活は可能だが、電気・水道・下水道・ガスが使用できなく、電話もつながりにくい。

「はい」と回答した割合は、「自宅は耐震性が確保された建物ですか。」と「家屋の倒壊や火災等により危険な状況である場合や、避難情報が発令された場合、安全確保のために避難できる近くの公園や市立小・中・高等学校などを知っていますか。」がともに66.5%と最も高く、次いで「生活に必要な非常用の電源（モバイルバッテリー、ポータブル電源、乾電池など）を備えていますか」（56.7%）、「自宅内の家具の転倒防止や滑り止めなどを行っていますか」（42.9%）と続いている。

【図表 3】地震に関し、家庭で行っている備え

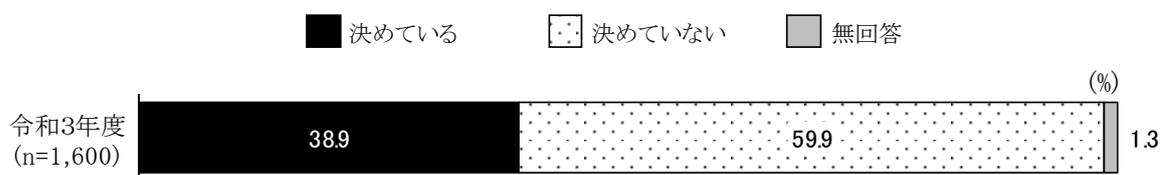


【参考】

令和3年度第2回調査（郵送調査）とは、調査方法が異なるため単純に比較することはできないが、備えを行っている割合は「家庭内での連絡や取り決め」と「生活に必要な非常用電源の備え」では今回の方が高くなっているが、「自宅内の家具の転倒防止や滑り止めの実施」と「非常用持出袋の用意」では今回の方が低くなっている。

【図表 4】地震に関し、家庭で行っている備え（令和3年度第2回調査の結果）

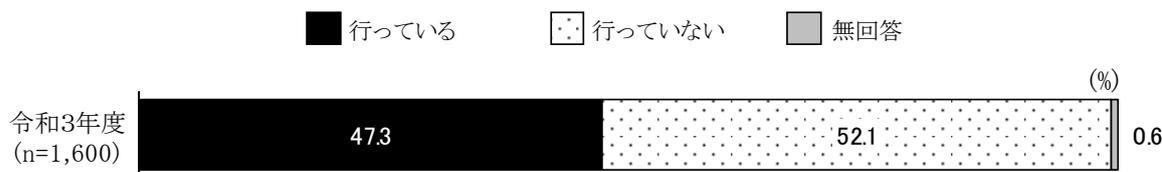
●家庭内でどのように連絡し、行動するか決めていきますか。また、一人暮らしの方は、ご家族や友人等どのように連絡し、行動するか決めていきますか。



●生活に必要な非常用の電源(バッテリー、発電機、電池など)を備えていますか。



●自宅内の家具の転倒防止や滑り止めなどを行っていますか。



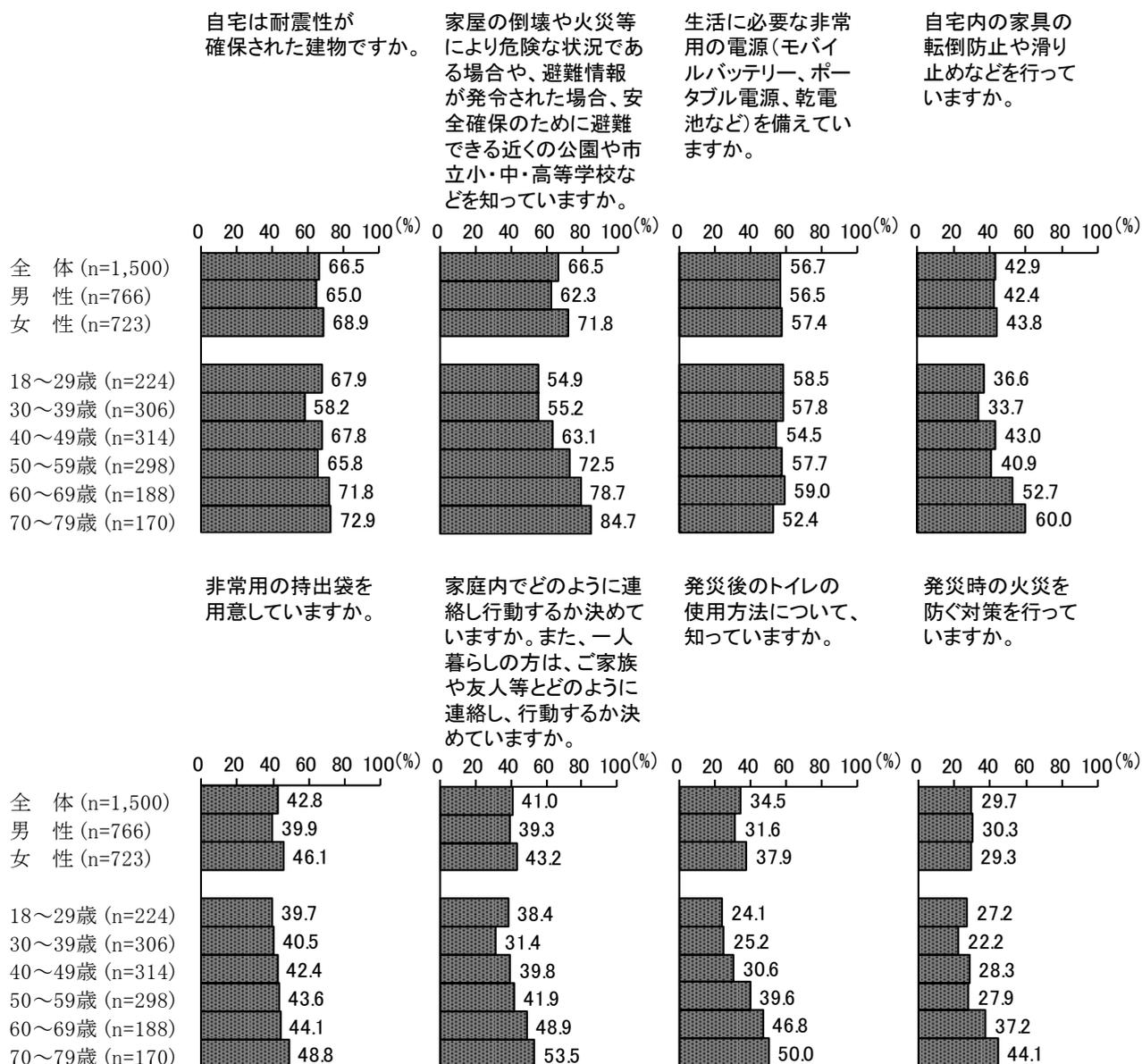
●非常用の持出袋を用意していますか。



「はい」と回答した割合を性別に見ると、男性よりも女性の方が「家屋の倒壊や火災等により危険な状況である場合や、避難情報が発令された場合、安全確保のために避難できる近くの公園や市立小・中・高等学校などを知っていますか。」は 9.5 ポイント、「発災後のトイレの使用方法について、知っていますか。」は 6.3 ポイント、「非常用の持出袋を用意していますか。」は 6.2 ポイント高くなっている。

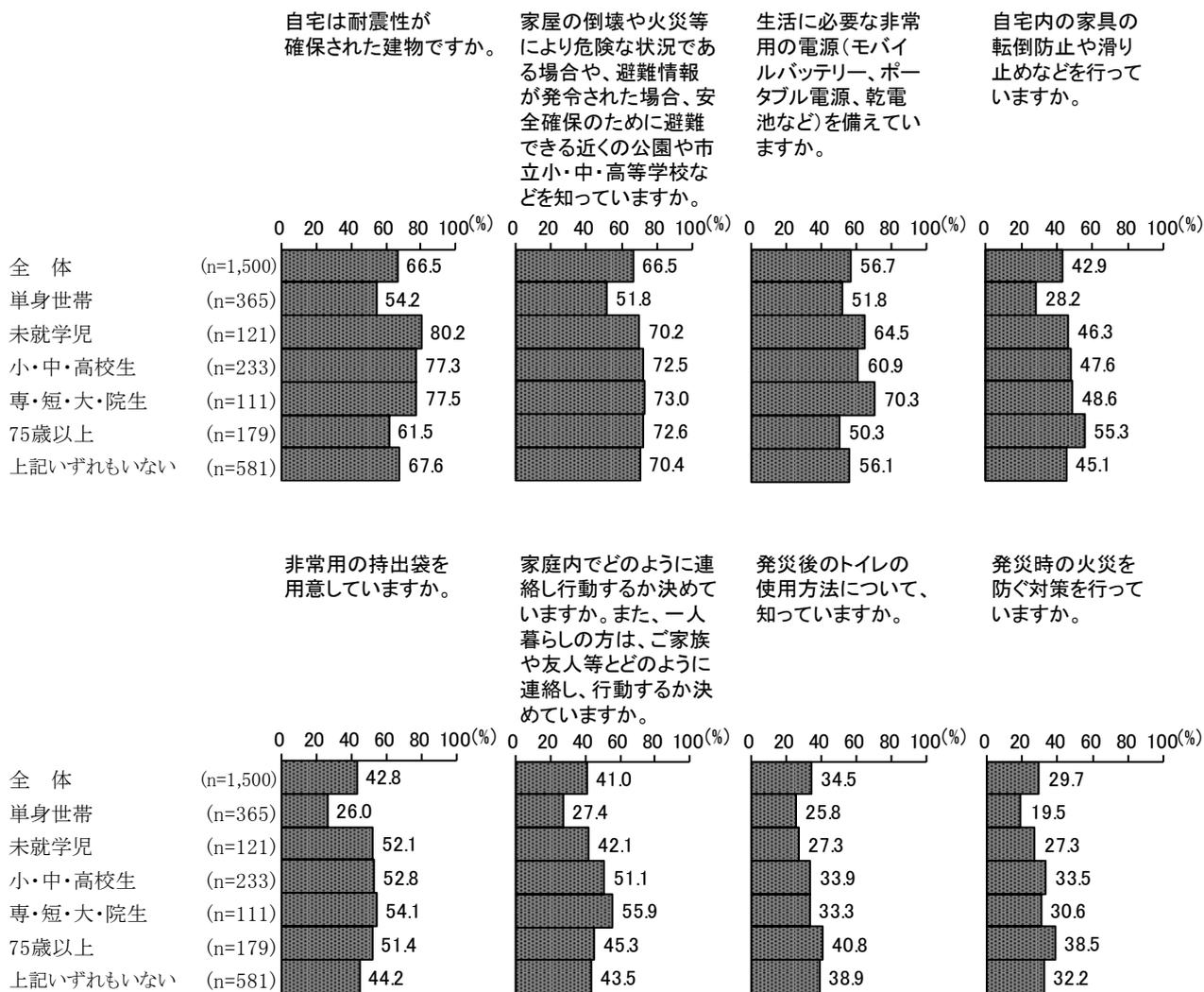
年齢別に見ると、「自宅は耐震性が確保された建物ですか。」と「生活に必要な非常用の電源（モバイルバッテリー、ポータブル電源、乾電池など）を備えていますか。」を除いた項目で、概ね年齢が上がるほど高くなっている。

【図表 5】地震に関し、家庭で行っている備え（「はい」回答者）
（性別、年齢別）



「はい」と回答した割合を同居者別に見ると、「生活に必要な非常用の電源（モバイルバッテリー、ポータブル電源、乾電池など）を備えていますか。」を除いた項目で、「単身世帯」が最も低くなっている。

【図表 6】地震に関し、家庭で行っている備え（「はい」回答者）
（同居者別）

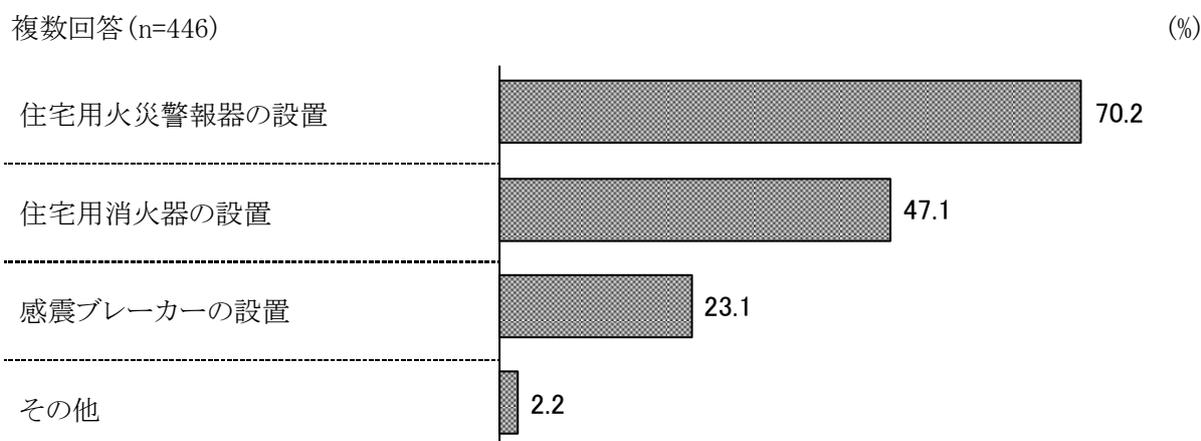


(3) 発災時の火災を防ぐ対策

Q2-1. 前問の「発災時の火災を防ぐ対策を行っていますか。」の質問で、「はい」を選んだ方にかかっています。どのような対策を行っていますか。

発災時の火災を防ぐ対策を行っているとした人にどのような対策を行っているかたずねたところ、「住宅用火災警報器の設置」が70.2%と最も高く、次いで「住宅用消火器の設置」(47.1%)、「感震ブレーカーの設置」(23.1%)と続いている。

【図表 7】 発災時の火災を防ぐ対策（複数回答）



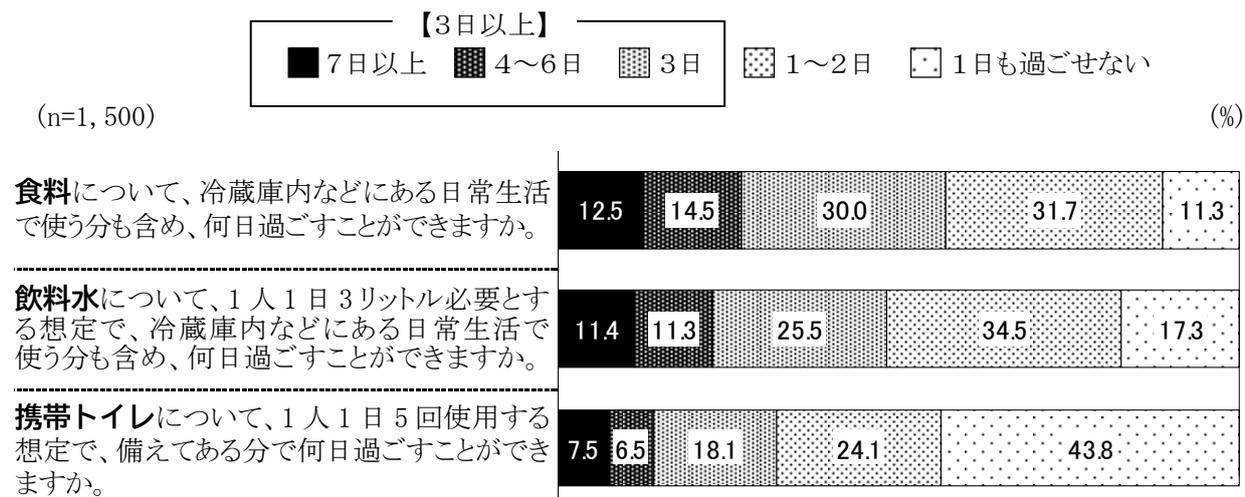
(4) 家庭における備蓄の状況

Q3. 引き続き、地震に関し、あなたが行っている家庭での備えについてうかがいます。
今日現在の状況で、項目ごとにあてはまるものを選んでください。

【この設問では、地震による以下の被害状況を想定しています】
 ・大規模な地震であり、お住いの地域では一部木造住宅の倒壊や火災などが発生。
 ・自宅は無事で生活は可能だが、電気・水道・下水道・ガスが使用できなく、電話もつながりにくい。

家庭における備蓄について、川崎市では最低限3日分、できれば7日分以上必要としているが、【3日以上】（「7日以上」、「4～6日」、「3日」の合計）の割合は、「食料」が57.1%、「飲料水」が48.3%、「携帯トイレ」が32.1%であった。また、「7日以上」と回答した割合は、「食料」が12.5%、「飲料水」が11.4%、「携帯トイレ」は7.5%であった。一方、「携帯トイレ」については、「1日も過ごせない」と回答した割合が43.8%と4割を超えている。

【図表 8】 家庭における備蓄の状況

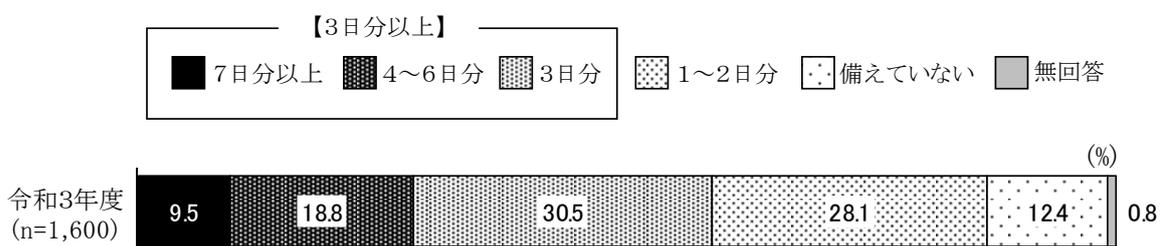


【参考】

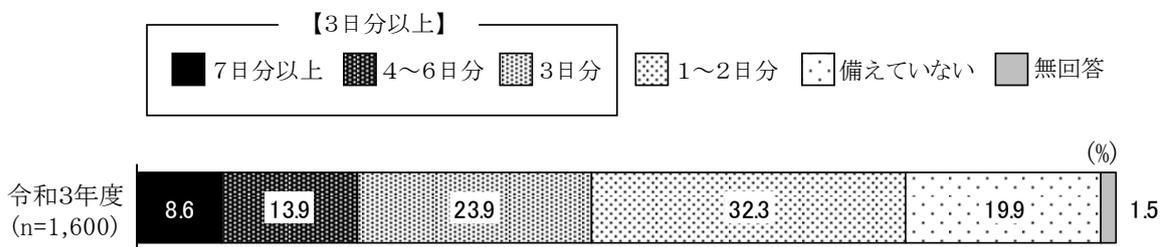
令和3年度第2回調査（郵送調査）とは、調査方法が異なるため単純に比較することはできないが、「食料」と「飲料水」は【3日分以上】の割合に大きな差はないが、「携帯トイレ」については、【3日分以上】の割合が今回は13ポイント高くなり、「備えていない（令和6年度は「1日も過ごせない」）が16.9ポイント低くなっている。

【図表9】 家庭における備蓄の状況（令和3年度第2回調査の結果）

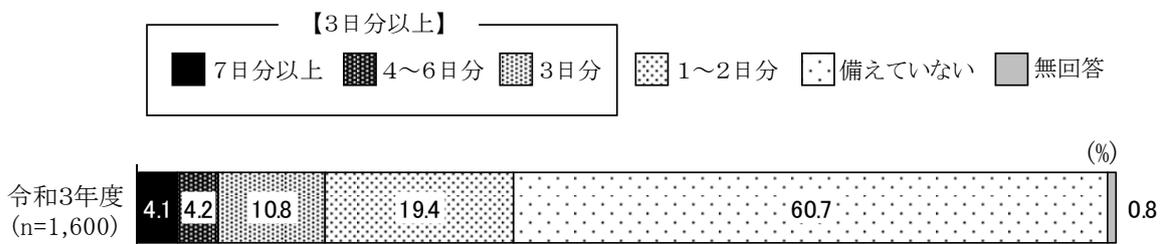
- 何日分の食料を備えていますか。
※冷蔵庫内などにある日常生活で使う分も含めます。



- 何日分の飲料水を備えていますか。
※1日1人3リットル必要としてお考えください。（冷蔵庫などにある日常生活で使う分も含めます）



- 携帯トイレ（簡易トイレ）を備えていますか。
※1日1人5回使用としてお考えください。

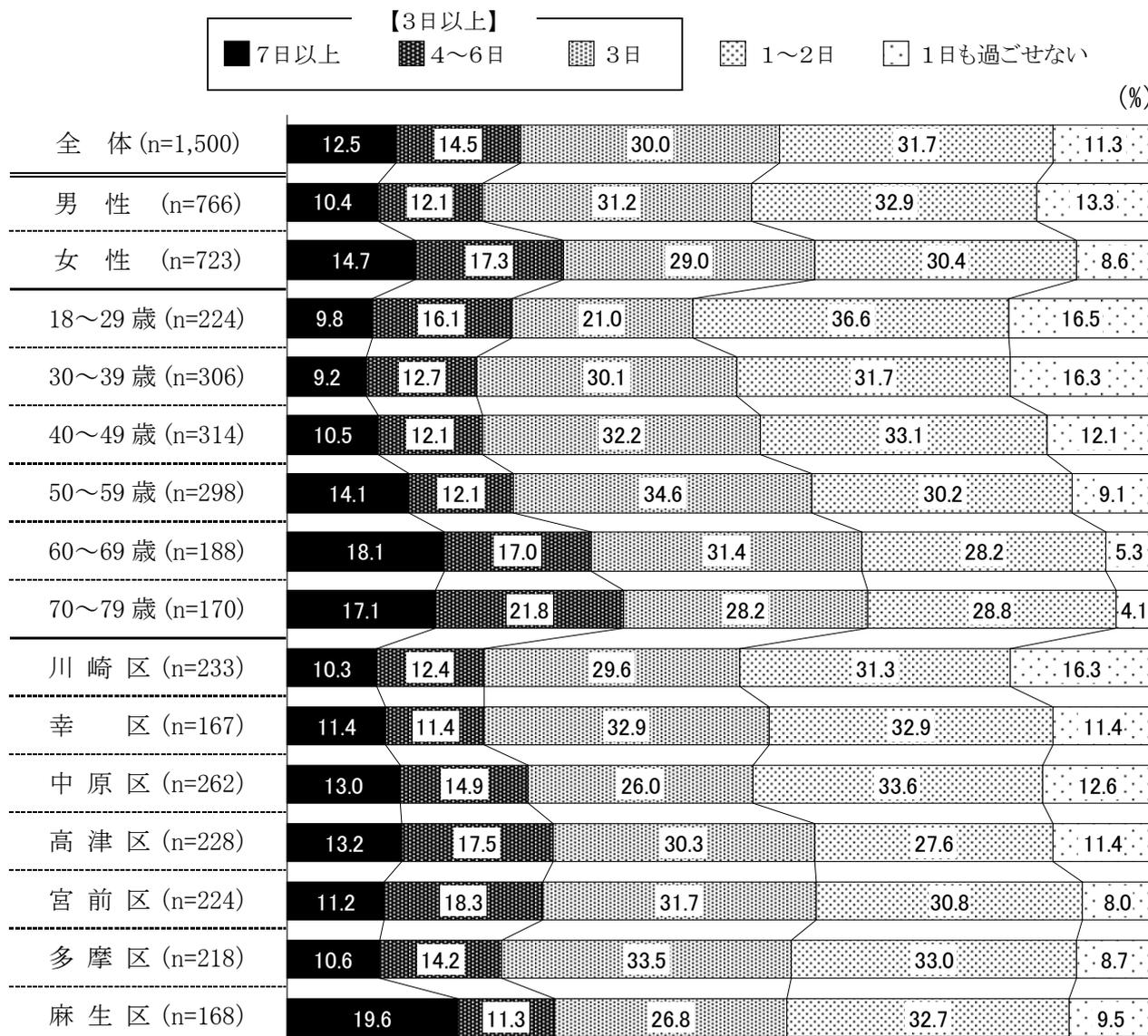


「食料」の備蓄状況について性別に見ると、【3日以上】の割合は男性よりも女性の方が7.2ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、【3日以上】の割合は50歳代以上が6割を超えている。

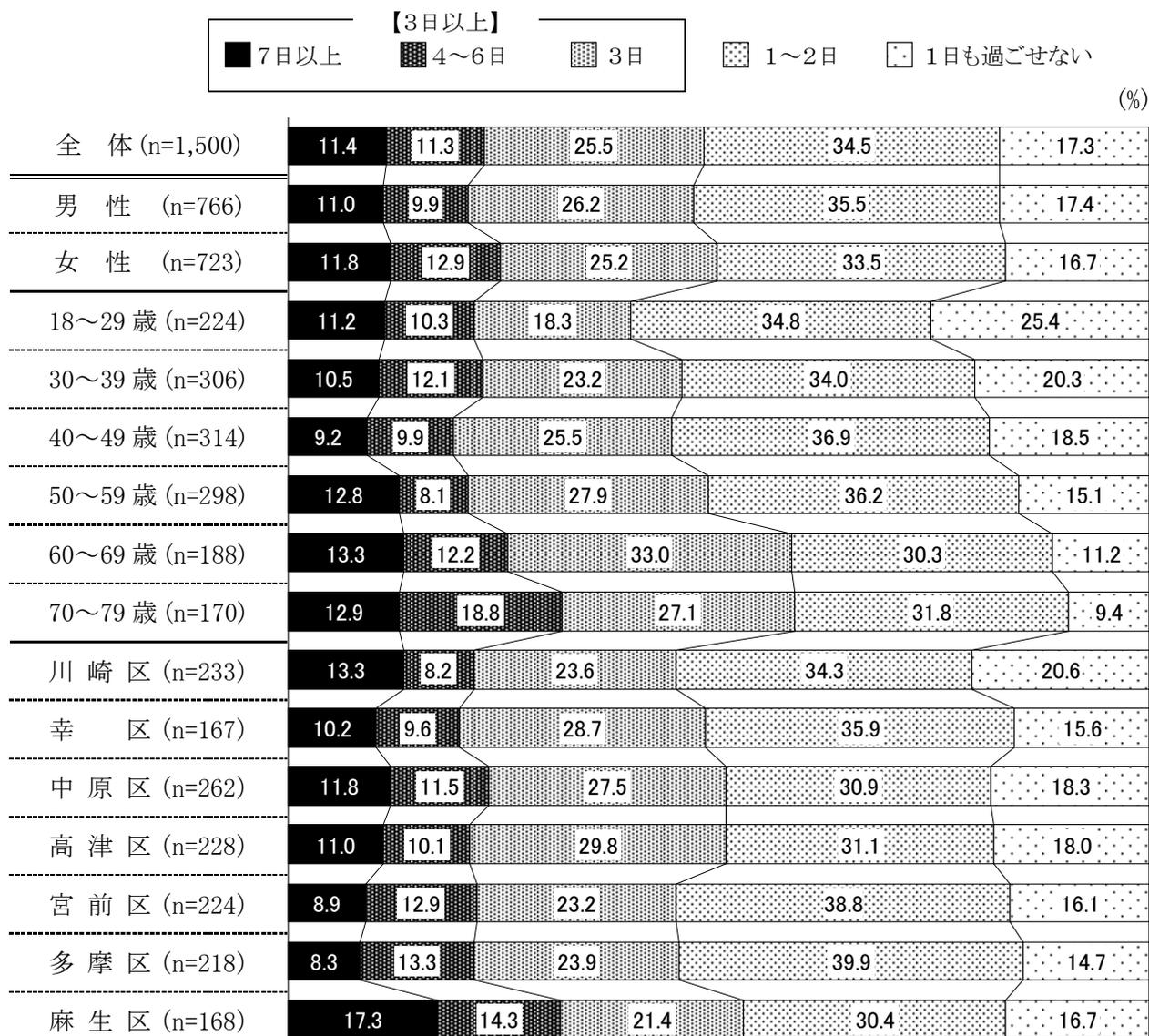
居住区別に見ると、【3日以上】の割合は「高津区」と「宮前区」が6割を超えている。また、「麻生区」では「7日以上」が19.6%と高くなっている。

【図表 10】食料の備蓄状況（性別、年齢別、居住区別）



「飲料水」の備蓄状況について、性別では傾向に大きな差は見られない。
 年齢別に見ると、【3日以上】の割合は60歳代以上が5割を超えている。
 居住区別に見ると、【3日以上】の割合は「中原区」、「高津区」、「麻生区」が5割を超えている。また、「麻生区」では「7日以上」が17.3%と高くなっている。

【図表 11】飲料水の備蓄状況（性別、年齢別、居住区別）

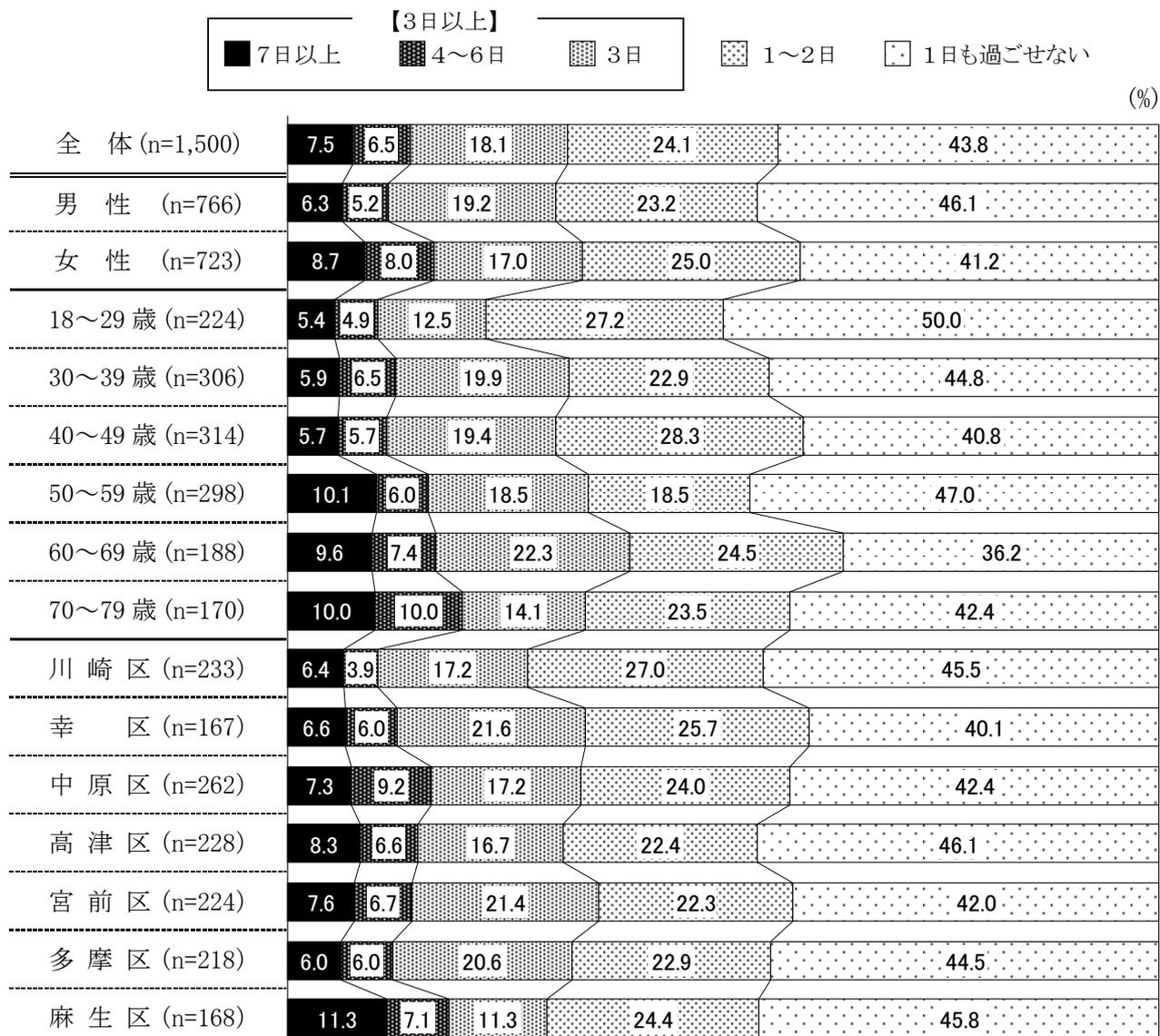


「携帯トイレ」の備蓄状況について性別に見ると、「1日も過ごせない」の割合は女性よりも男性の方が4.9ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、【3日以上】の割合は60～69歳が39.4%と最も高い。

居住区別に見ると、【3日以上】の割合は「宮前区」が35.7%と最も高く、「川崎区」と「麻生区」では3割を下回っているが、「麻生区」では「7日以上」が11.3%と高くなっている。

【図表 12】携帯トイレの備蓄状況（性別、年齢別、居住区別）

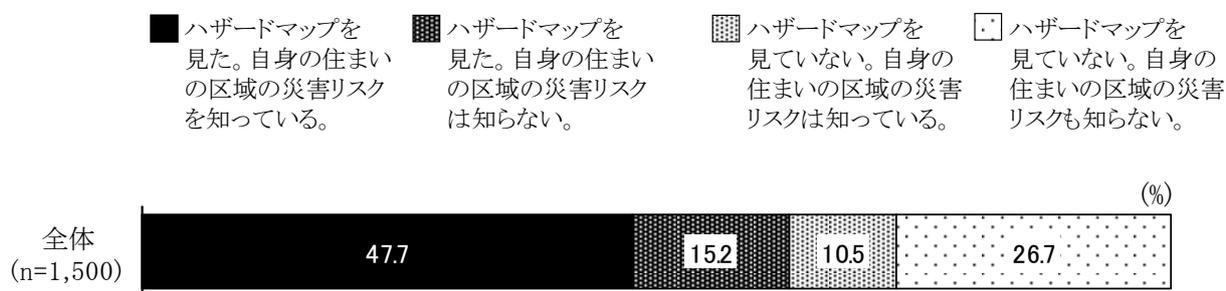


(5) ハザードマップの閲覧・内容認知状況

Q 4. 川崎市が発行している洪水や内水、土砂災害のハザードマップを見たことがありますか。また、ご自身のお住まいが、洪水や内水による浸水や、土砂災害の区域内にあるか否かを知っていますか。

「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクを知っている。」(47.7%) が最も高く、次いで「ハザードマップを見ていない。自身の住まいの区域の災害リスクも知らない。」(26.7%)、「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクは知らない。」(15.2%)と続いている。

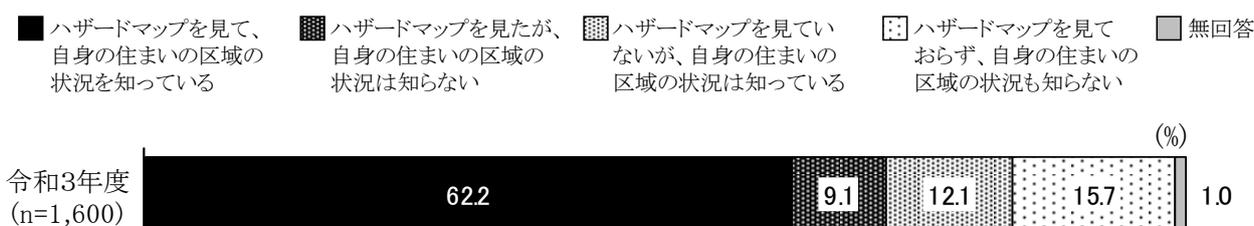
【図表 13】 ハザードマップの閲覧・内容認知状況



【参考】

令和3年度第2回調査（郵送調査）とは、調査方法が異なるため単純に比較することはできないが、「ハザードマップを見て、自身の住まいの区域の状況を知っている」（令和6年度は「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクを知っている。」）の割合は、今回の方が14.5ポイント低くなっている。

【図表 14】 ハザードマップの閲覧・内容認知状況（令和3年度第2回調査の結果）

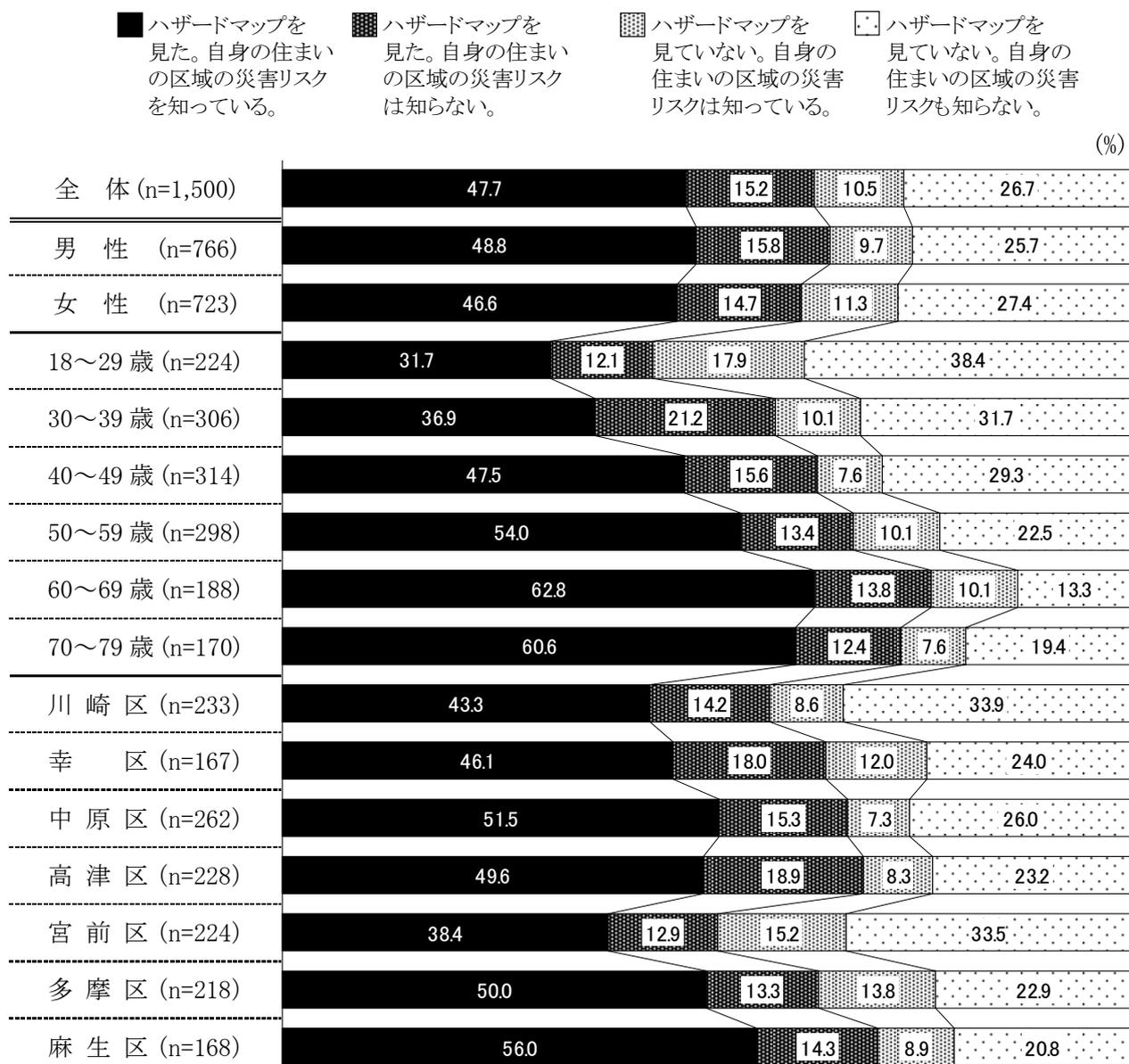


ハザードマップの閲覧・内容認知状況について、性別では傾向に大きな差は見られない。

年齢別に見ると、「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクを知っている。」の割合は、60歳代以上は6割を超えて高いが、30歳代以下では3割台にとどまっている。

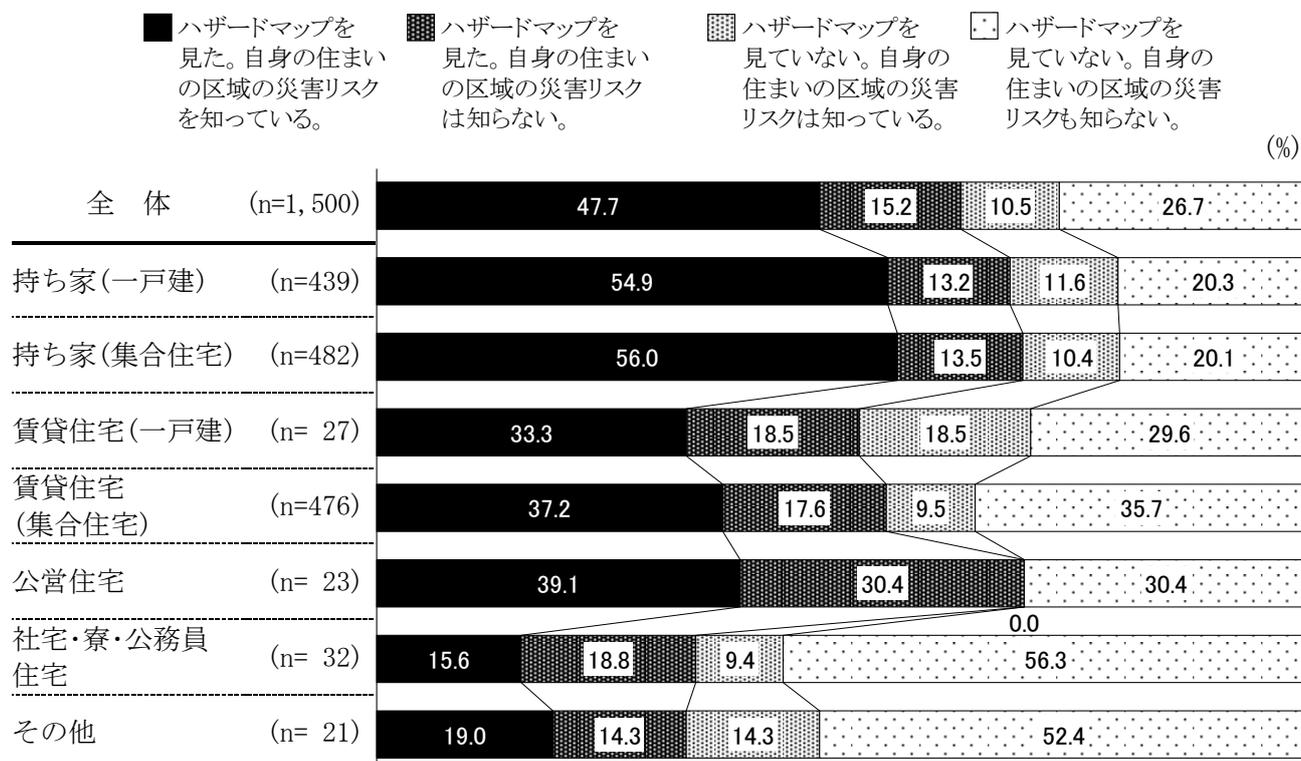
居住区別に見ると、「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクを知っている。」の割合は「麻生区」(56.0%)が最も高く、「宮前区」(38.4%)が最も低い。

【図表 15】ハザードマップの閲覧・内容認知状況（性別、年齢別、居住区別）



ハザードマップの閲覧・内容認知状況について、住居形態別に見ると、「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクを知っている。」の割合は「持ち家（一戸建）」と「持ち家（集合住宅）」が5割台と高くなっている。

【図表 16】ハザードマップの閲覧・内容認知状況（住居形態別）

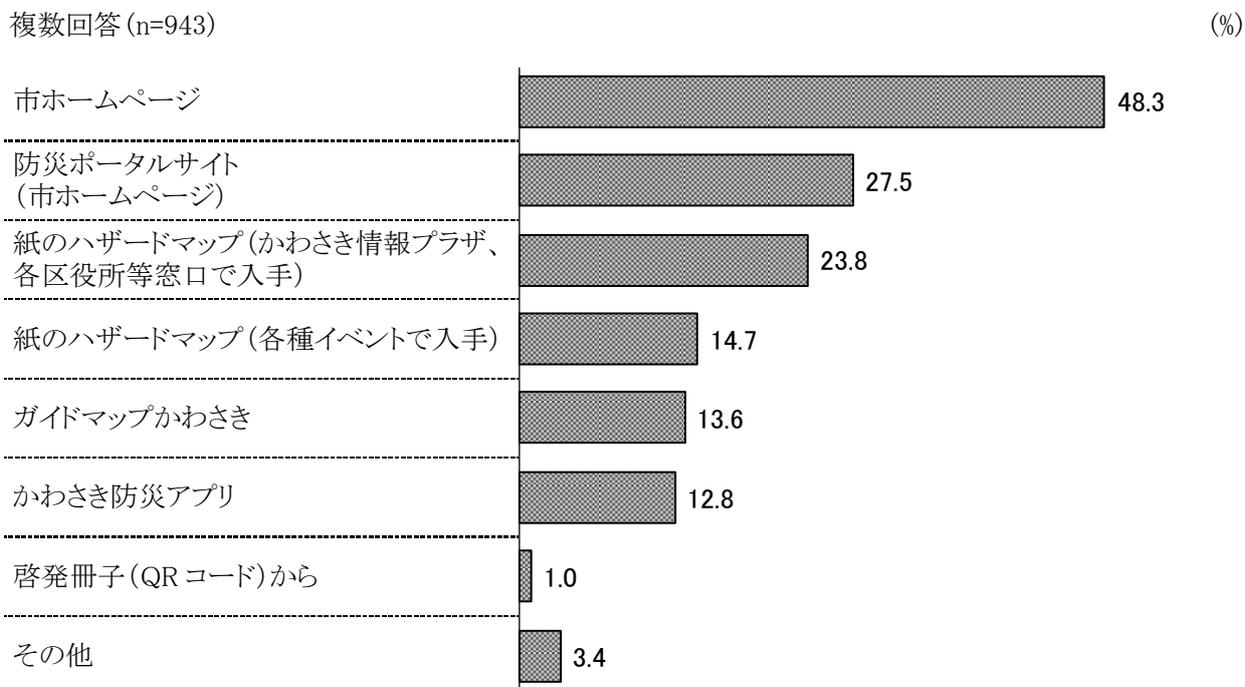


(6) ハザードマップの閲覧手段

Q4-1. 前問で「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクを知っている。」
又は「ハザードマップを見た。自身の住まいの区域の災害リスクは知らない。」を選んだ
方にうかがいます。ハザードマップをどのような手段で見ましたか。

ハザードマップを見た方に閲覧手段についてうかがったところ、「市ホームページ」が48.3%と最も高く、次いで「防災ポータルサイト（市ホームページ）」(27.5%)、「紙のハザードマップ（かわさき情報プラザ、各区役所等窓口で入手）」(23.8%)、「紙のハザードマップ（各種イベントで入手）」(14.7%)と続いている。

【図表 17】ハザードマップの閲覧手段（複数回答）



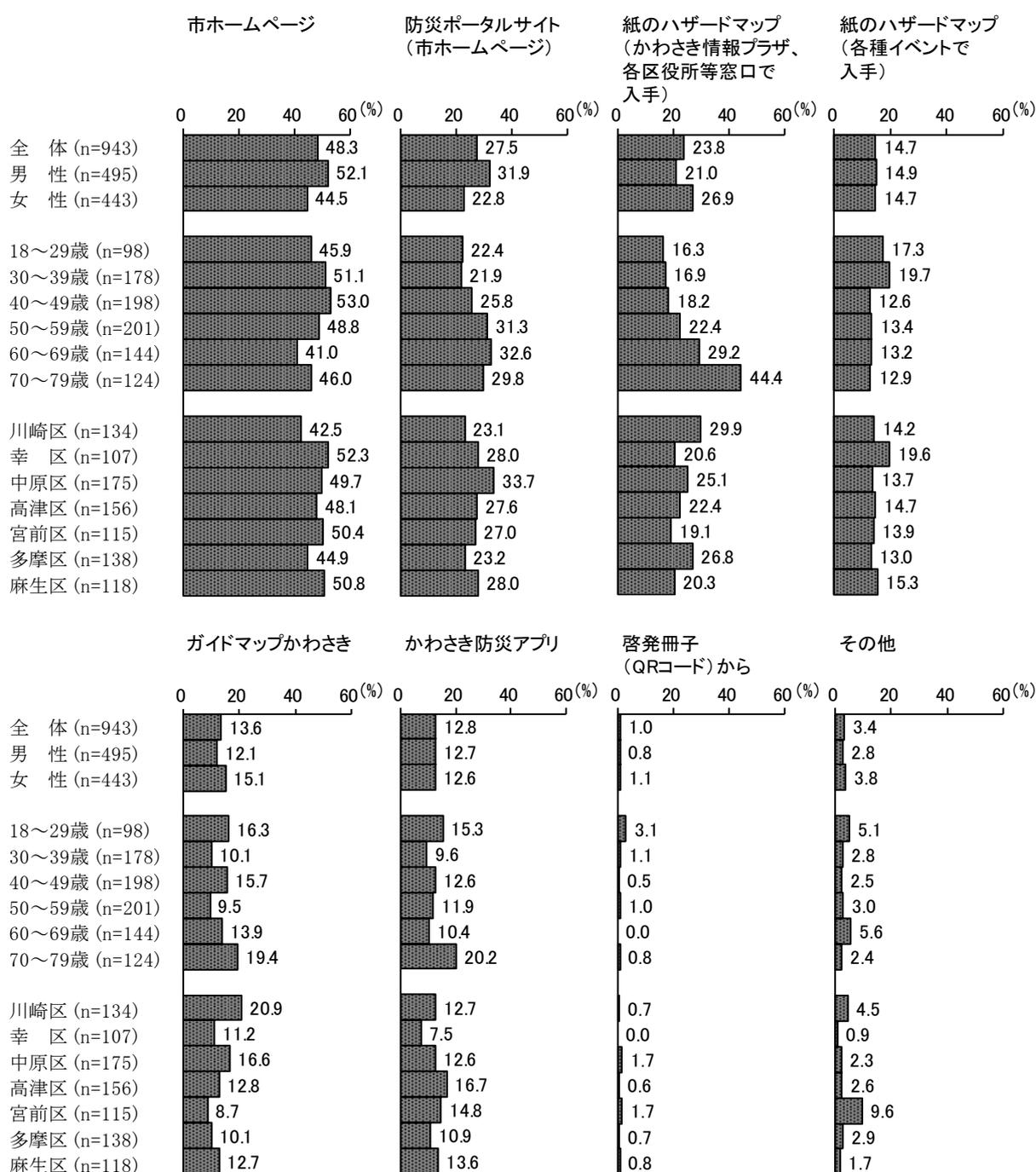
性別に見ると、「市ホームページ」、「防災ポータルサイト（市ホームページ）」の割合は、女性よりも男性の方が高くなっている。一方、「紙のハザードマップ（かわさき情報プラザ、各区役所等窓口で入手）」は男性よりも女性の方が高くなっている。

年齢別に見ると、「紙のハザードマップ（かわさき情報プラザ、各区役所等窓口で入手）」は概ね年齢が上がるほど高く、70～79歳では4割を超えている。

居住区別に見ると、「紙のハザードマップ（かわさき情報プラザ、各区役所等窓口で入手）」と「ガイドマップかわさき」は「川崎区」が最も高く、「防災ポータルサイト（市ホームページ）」は「中原区」が最も高くなっている。また、「紙のハザードマップ（各種イベントで入手）」は「幸区」が最も高い。

【図表 18】ハザードマップの閲覧手段（複数回答）

（性別、年齢別、居住区別）

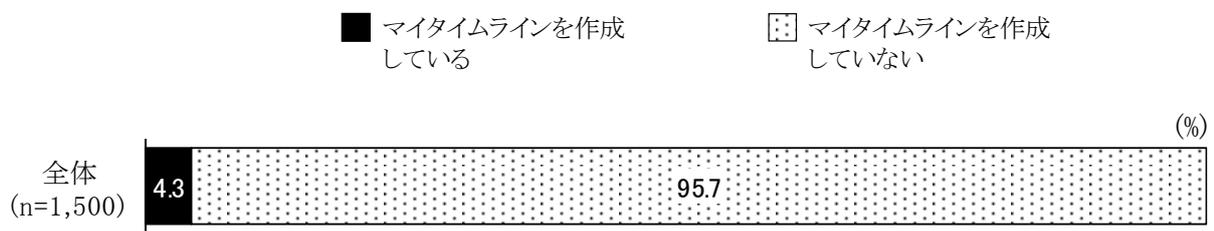


(7) マイタイムラインの作成状況

Q5. 川崎市では、大雨や台風などの風水害に備えて、生活の状況に合わせた避難行動（自分の逃げ方）をマイタイムラインとして平常時に作成することを推奨していますが、あなたは作成していますか。

「マイタイムラインを作成している」が4.3%、「マイタイムラインを作成していない」が95.7%であった。

【図表 19】 マイタイムラインの作成状況

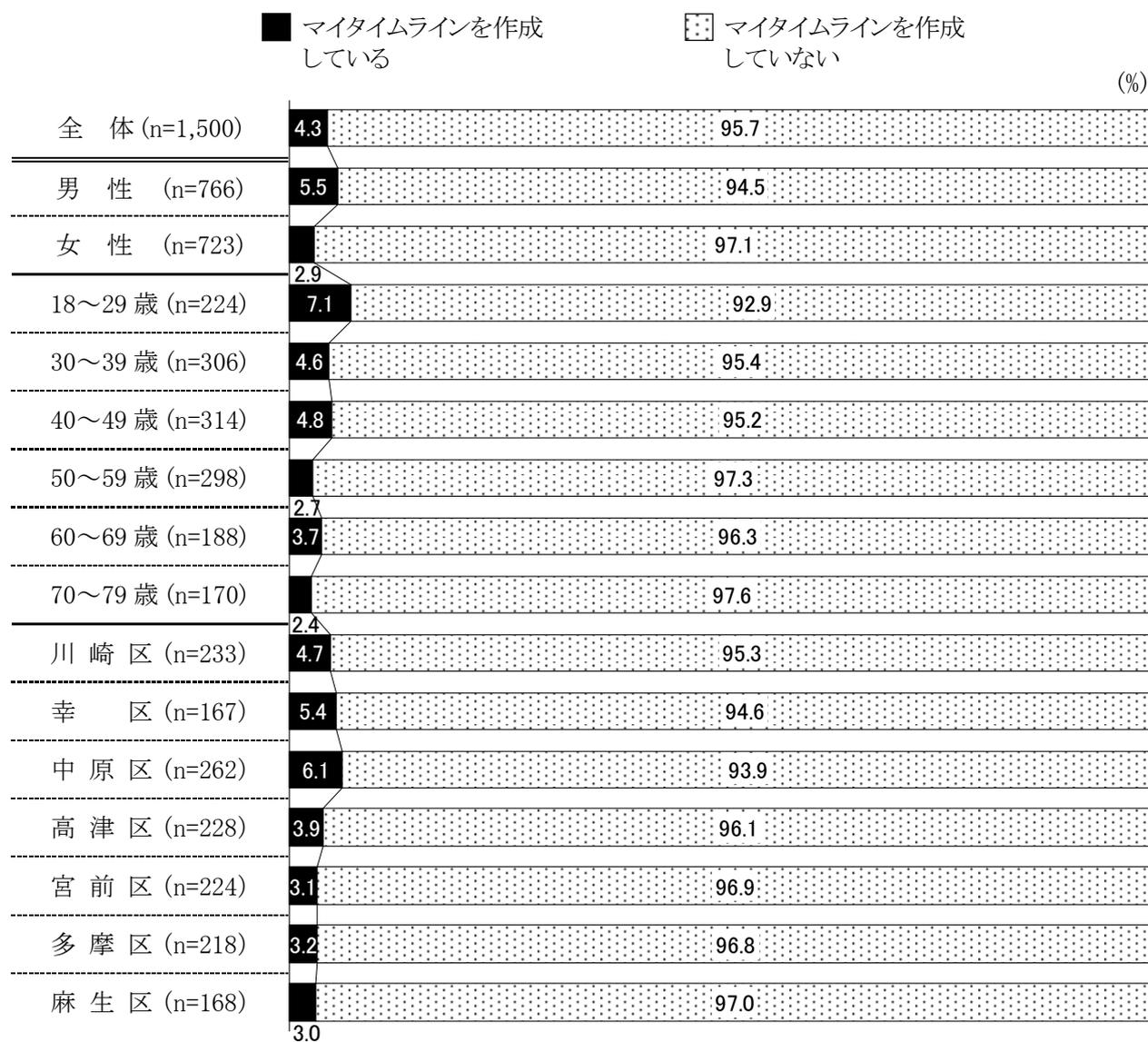


マイタイムラインの作成状況について性別に見ると、「マイタイムラインを作成している」の割合は、女性よりも男性の方が2.6ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、「マイタイムラインを作成している」の割合は18～29歳（7.1%）が最も高くなっている。

居住区別に見ると、「マイタイムラインを作成している」の割合は「中原区」（6.1%）と「幸区」（5.4%）が5%を超えている。

【図表 20】マイタイムラインの作成状況（性別、年齢別、居住区別）



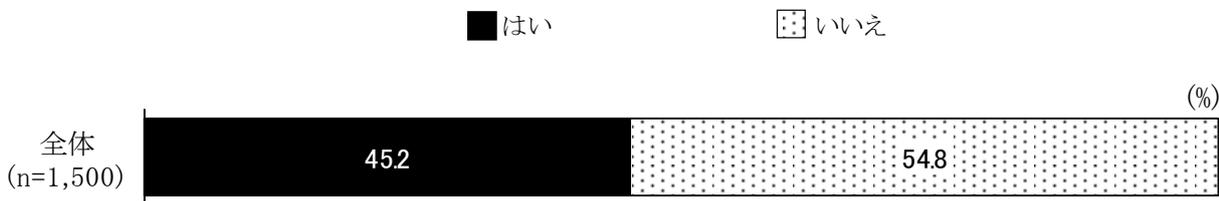
(8) 地域活動や近所付き合い等について

Q6. 近年、災害が頻発化・激甚化しており、迅速かつ円滑な復旧や被災者の支援を行うためには、市が行う災害対応だけでなく、地域住民の方々の連携や協力が今後より一層重要になってきます。このことを踏まえ、項目ごとにあてはまるものを選んでください。

① 現在、町内会・自治会に加入していますか。

「はい」が45.2%、「いいえ」が54.8%であった。

【図表 21】 町内会・自治会加入状況



【参考】

令和3年度第2回調査（郵送調査）とは、調査方法が異なるため単純に比較することはできないが、「加入している」（令和6年度は「はい」）の割合は今回の方が12.4ポイント低くなっている。

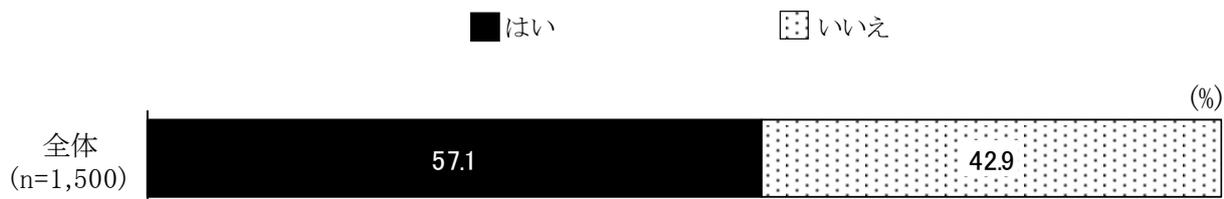
【図表 22】 町内会・自治会加入状況（令和3年度第2回調査の結果）



② 普段から、ご近所と挨拶を交わすことがありますか。

「はい」が57.1%、「いいえ」が42.9%であった。

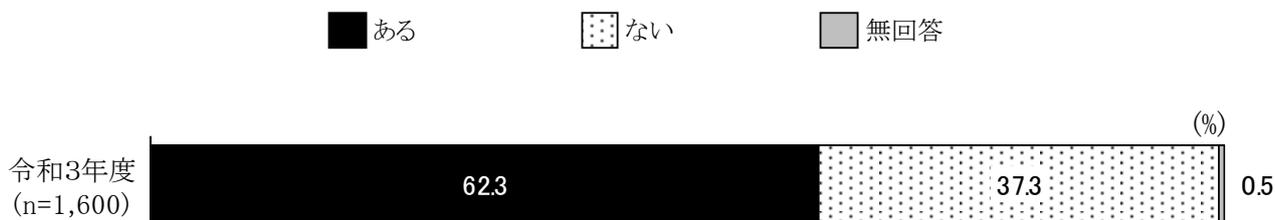
【図表 23】 近所付き合いの有無



【参考】

令和3年度第2回調査（郵送調査）とは、調査方法が異なるため単純に比較することはできないが、「ある」（令和6年度は「はい」）の割合は今回の方が5.2ポイント低くなっている。

【図表 24】 近所付き合いの有無（令和3年度第2回調査の結果）



③ 町内会・自治会やマンションの管理組合が行う防災訓練や講座に参加したことがありますか。

「はい」が19.9%、「いいえ」が80.1%であった。

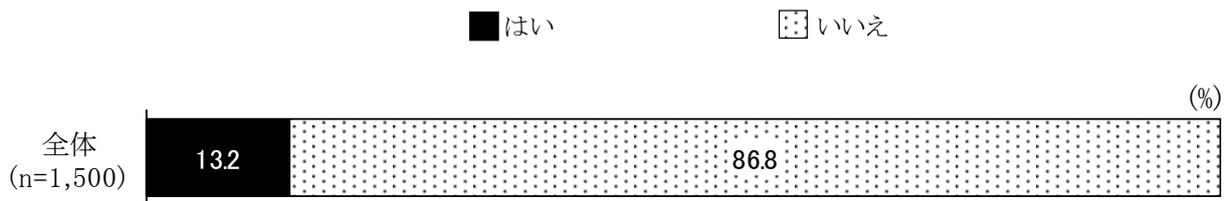
【図表 25】町内会・自治会・マンション管理組合主催の防災に関する取組参加状況



④ 町内会・自治会やマンションの管理組合以外が行う防災訓練や講座に参加したことがありますか。

「はい」が13.2%、「いいえ」が86.8%であった。

【図表 26】町内会・自治会・マンション管理組合以外の防災に関する取組参加状況

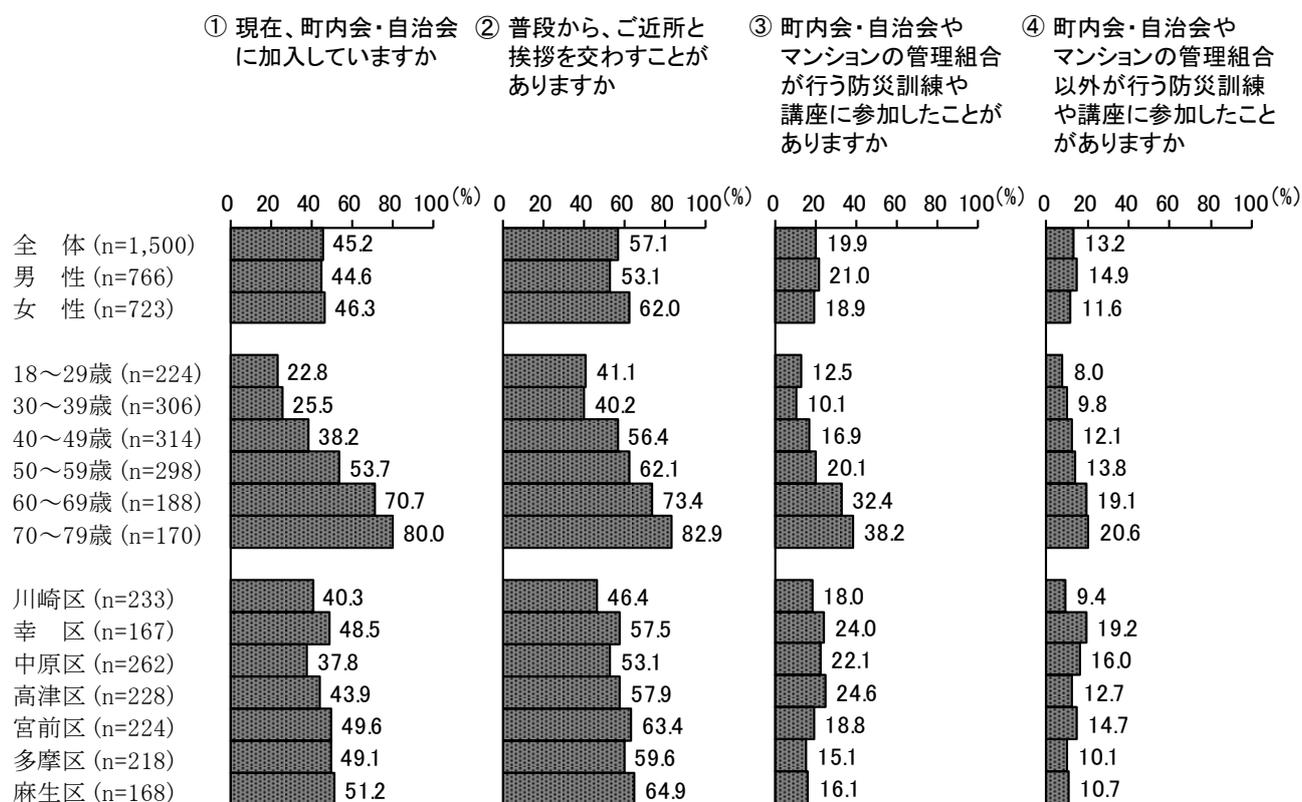


「はい」と回答した割合を性別に見ると、「普段から、ご近所と挨拶を交わすことがありますか。」の割合は、男性よりも女性の方が8.9ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、全ての項目で概ね年齢が上がるほど高くなっている。

居住区別に見ると、「現在、町内会・自治会に加入していますか。」は「中原区」(37.8%)が最も低く、「普段から、ご近所と挨拶を交わすことがありますか。」は「川崎区」(46.4%)が最も低くなっている。

【図表 27】 地域活動や近所付き合い等について（「はい」回答者）
（性別、年齢別、居住区別）

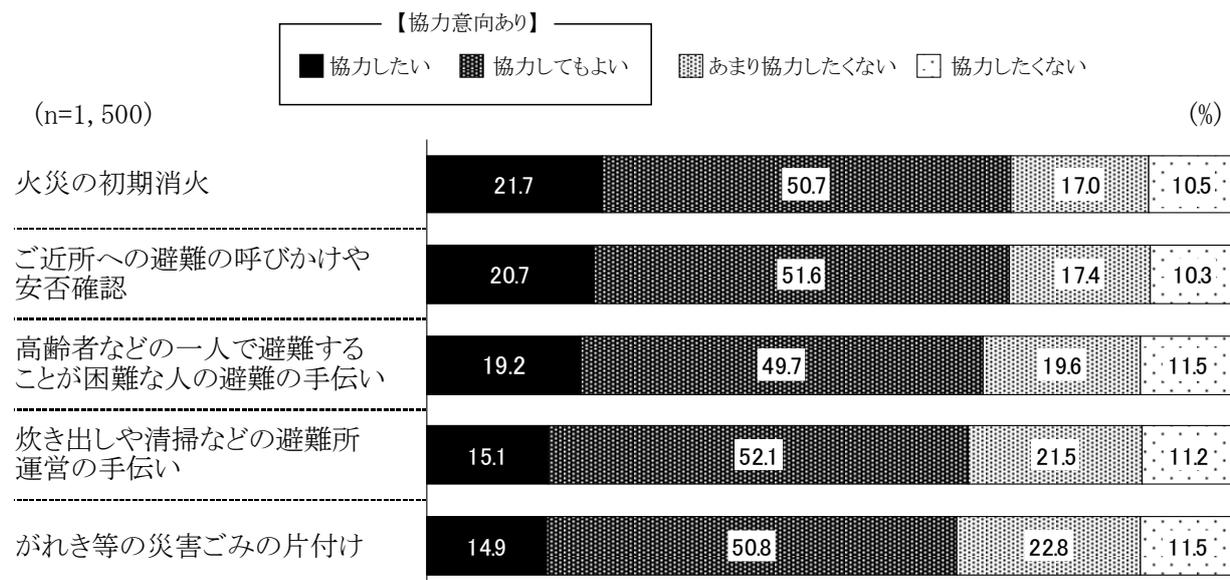


(9) 災害時に地域で行う活動への協力意向

Q7. 災害時、ご自身やご家族が無事な場合に、あなたは地域で行う活動への程度協力したいと思いますか。項目ごとにあてはまるものを選んでください。

「協力したい」と「協力してもよい」を合計した【協力意向あり】の割合は、全ての項目において6割を超え、「火災の初期消火」と「ご近所への避難の呼びかけや安否確認」では7割を超えている。

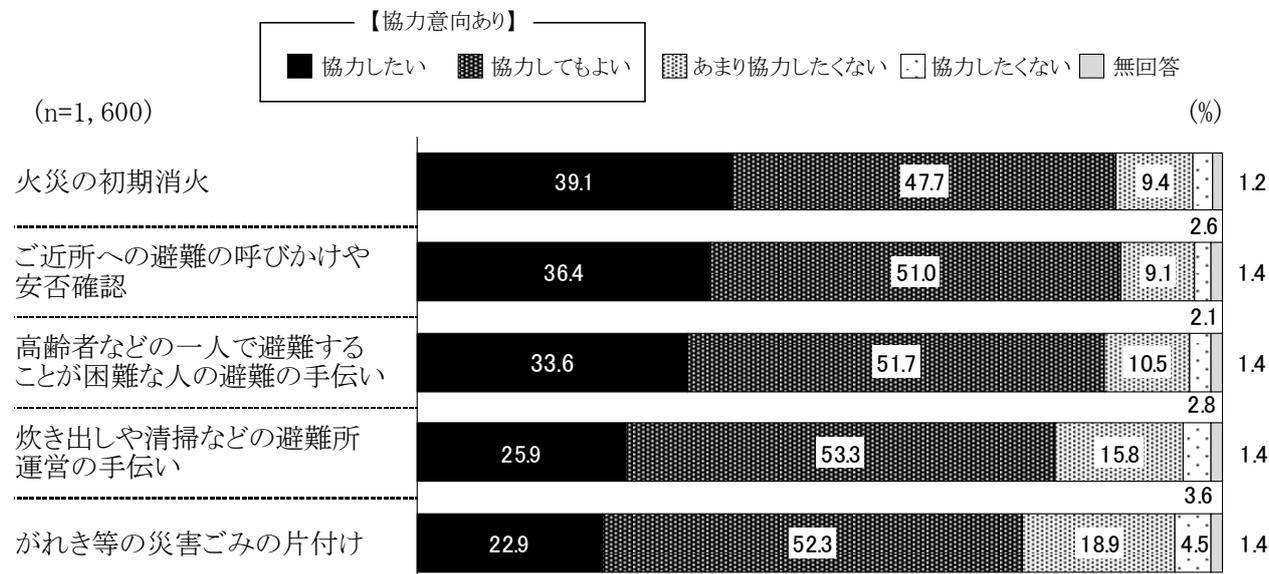
【図表 28】 災害時に地域で行う活動への協力意向



【参考】

令和3年度第2回調査（郵送調査）とは、調査方法が異なるため単純に比較することはできないが、【協力意向あり】の割合は全ての項目で今回の方が低くなっている。

【図表 29】 災害時に地域で行う活動への協力意向（令和3年度第2回調査の結果）

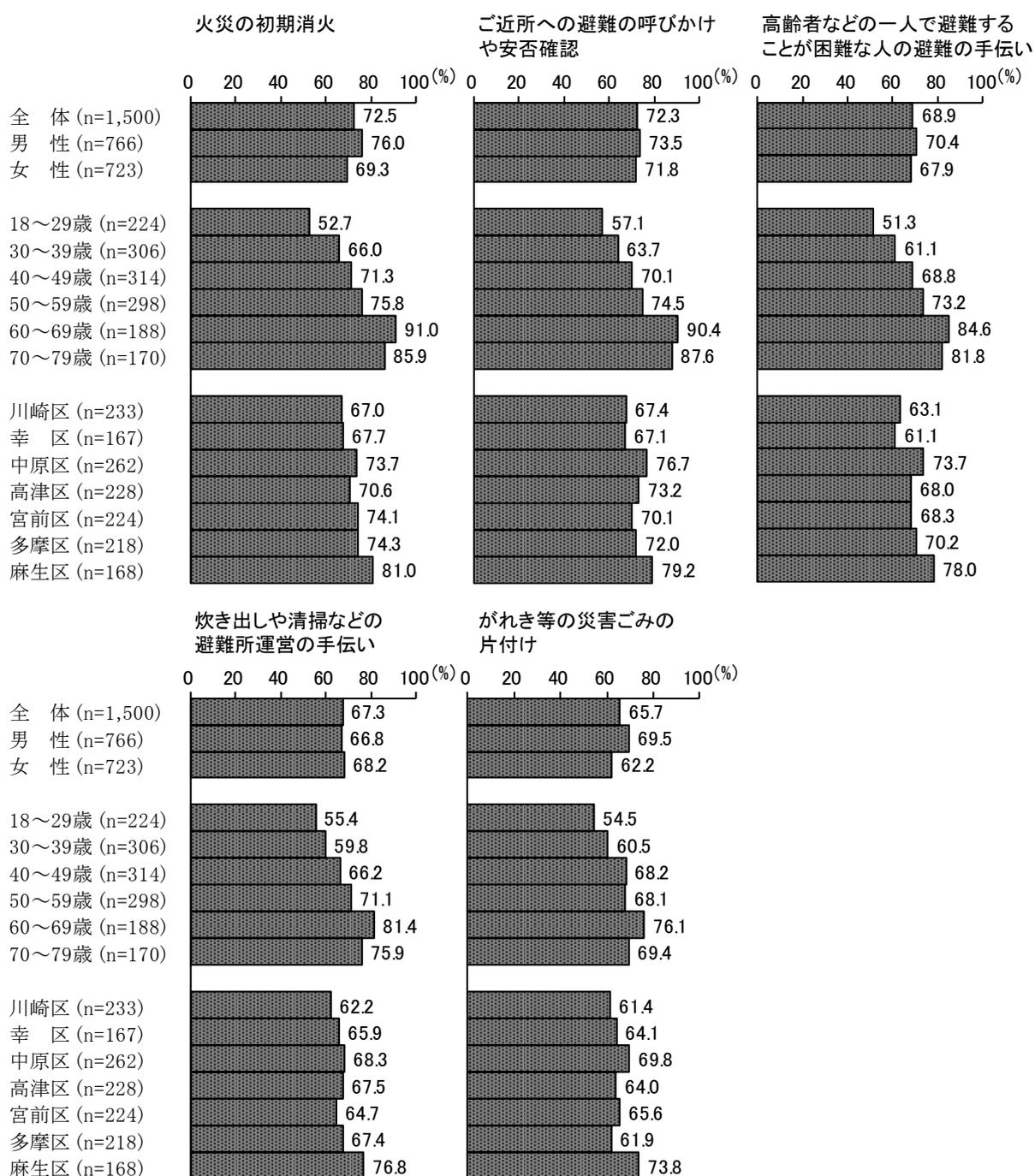


「協力したい」と「協力してもよい」を合計した【協力意向あり】の割合を性別に見ると、女性よりも男性の方が「火災の初期消火」で6.7ポイント高く、「がれき等の災害ごみの片付け」で7.3ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、全ての項目で18～29歳が最も低く、60～69歳が最も高くなっている。

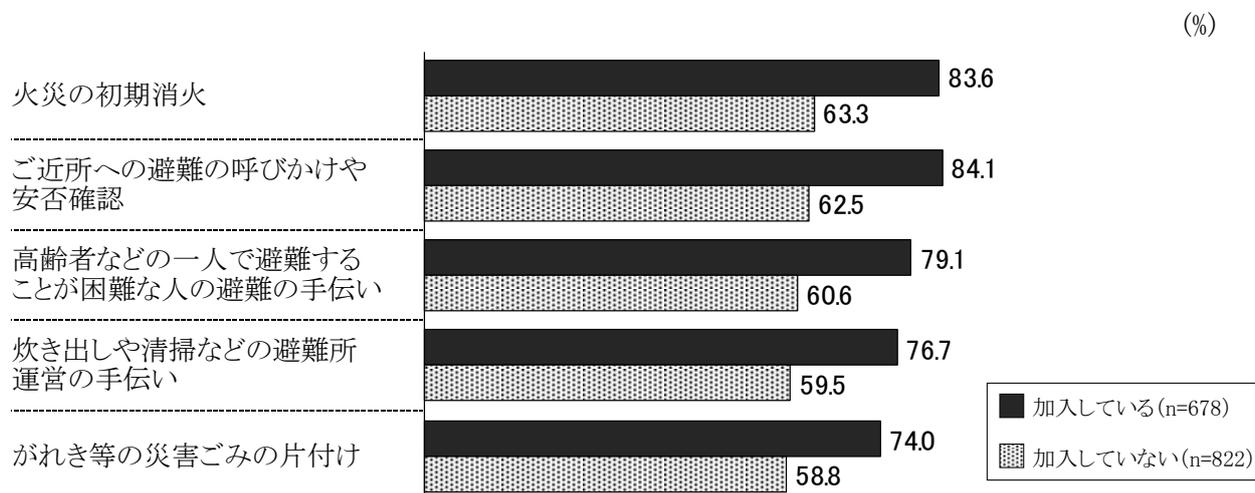
居住区別に見ると、全ての項目で「麻生区」が最も高くなっている。

【図表 30】災害時に地域で行う活動への協力意向（【協力意向あり】回答者）
（性別、年齢別、居住区別）



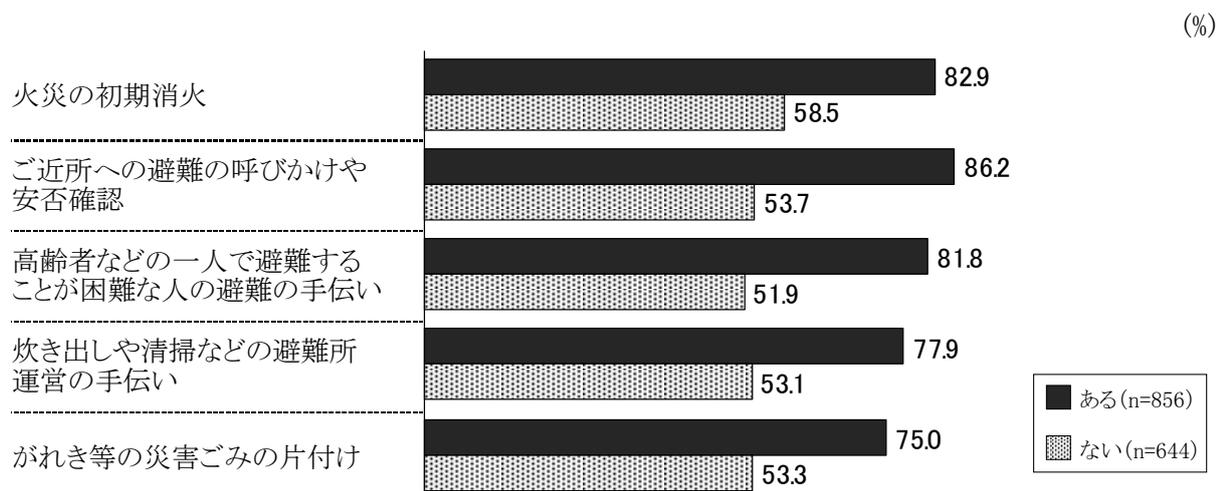
問6①の「町内会・自治会加入状況」別に見ると、「協力したい」と「協力してもよい」を合計した【協力意向あり】の割合は、全ての項目において加入している人の方が高くなっている。

【図表 31】 災害時に地域で行う活動への協力意向（【協力意向あり】回答者）
（町内会・自治会加入状況別）



問6②の「近所付き合いの有無」別に見ると、「協力したい」と「協力してもよい」を合計した【協力意向あり】の割合は、全ての項目において近所付き合いがある人の方が高くなっている。

【図表 32】 災害時に地域で行う活動への協力意向（【協力意向あり】回答者）
（近所付き合いの有無別）



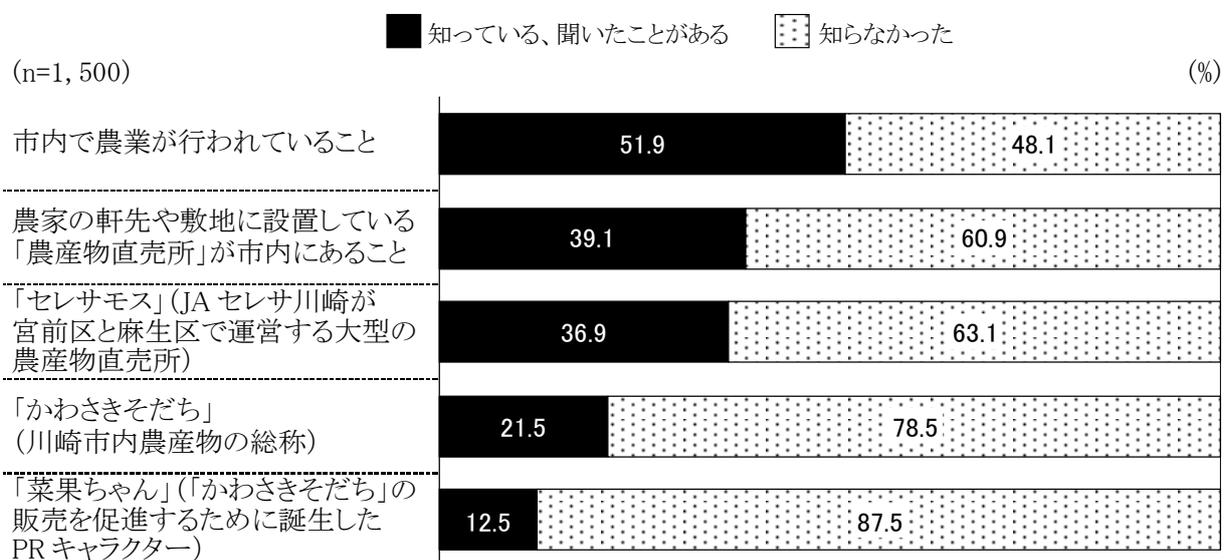
1.2 かわさきの農業について

(1) かわさきの農業についての認知

Q 8. かわさきの農業について、次の項目を知っていますか。

「知っている、聞いたことがある」の割合は、「市内で農業が行われていること」では 51.9%と半数を超えているが、その他の項目では4割を下回り、「菜果ちゃん」(「かわさきそだち」の販売を促進するために誕生した PR キャラクター)は 12.5%にとどまっている。

【図表 33】 かわさきの農業についての認知

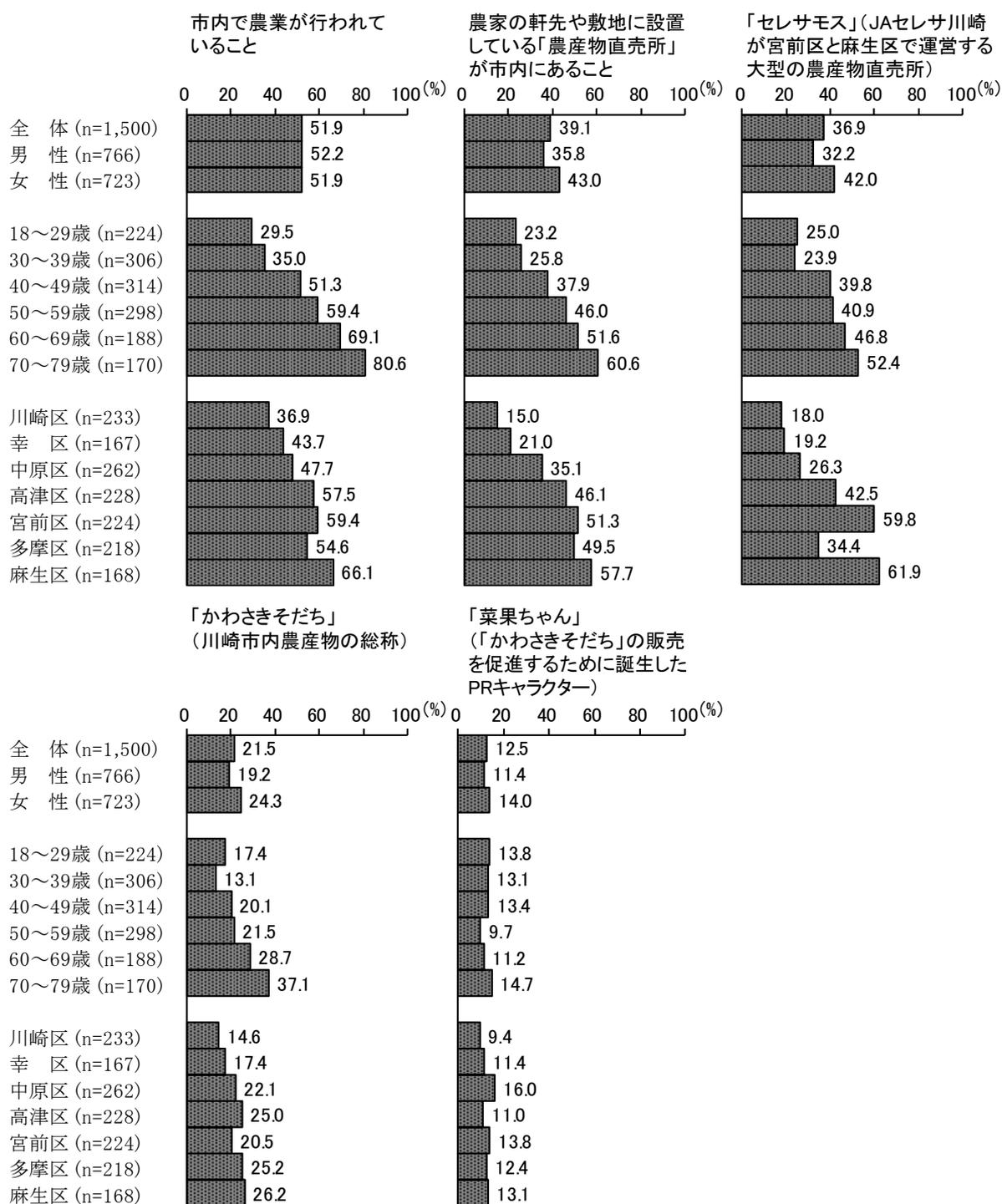


「知っている、聞いたことがある」の割合を性別に見ると、「市内で農業が行われていること」を除いた項目で男性よりも女性の方が高くなっている。

年齢別に見ると、「「菜果ちゃん」(「かわさきそだち」の販売を促進するために誕生した PR キャラクター)」を除いた項目で、概ね年齢が上がるほど高くなっている。

居住区別に見ると、全ての項目で「川崎区」が最も低く、「「菜果ちゃん」(「かわさきそだち」の販売を促進するために誕生した PR キャラクター)」を除いた項目で「麻生区」が最も高くなっている。

【図表 34】かわさきの農業についての認知(「知っている、聞いたことがある」回答者)
(性別、年齢別、居住区別)

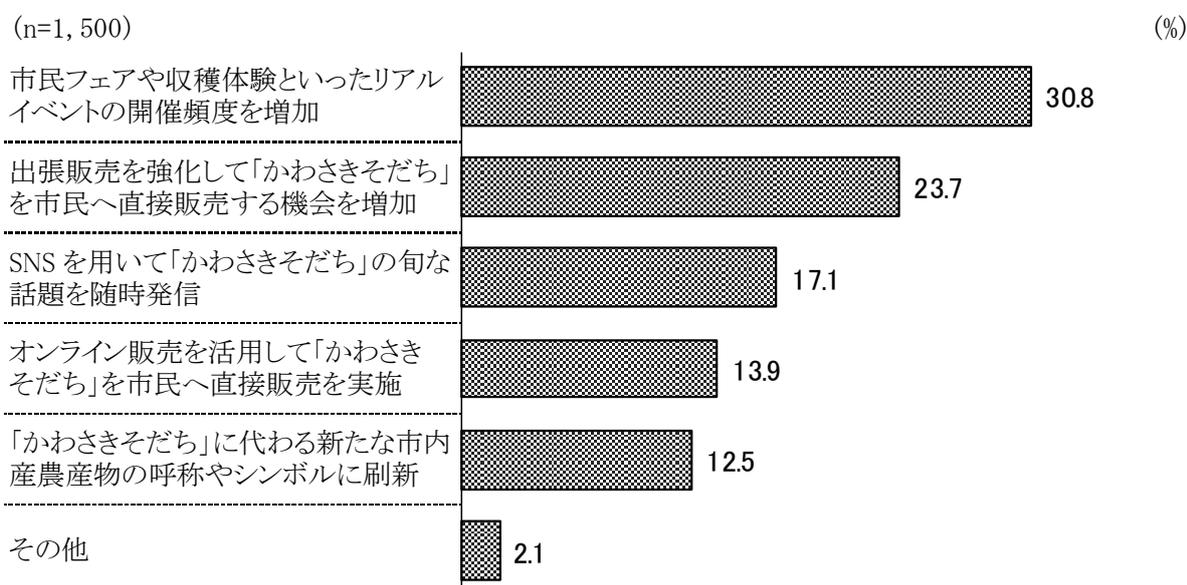


(2) 「かわさきの農業」の情報発信にあたり効果がありそうな方法

Q9. 今後、市が「かわさきの農業」を更に情報発信するにあたって、最も効果がありそうだと思う方法を次の中から選んでください。

「市民フェアや収穫体験といったリアルイベントの開催頻度を増加」が30.8%と最も高く、次いで「出張販売を強化して「かわさきそだち」を市民へ直接販売する機会を増加」(23.7%)、「SNSを用いて「かわさきそだち」の旬な話題を随時発信」(17.1%)、「オンライン販売を活用して「かわさきそだち」を市民へ直接販売を実施」(13.9%)と続いている。

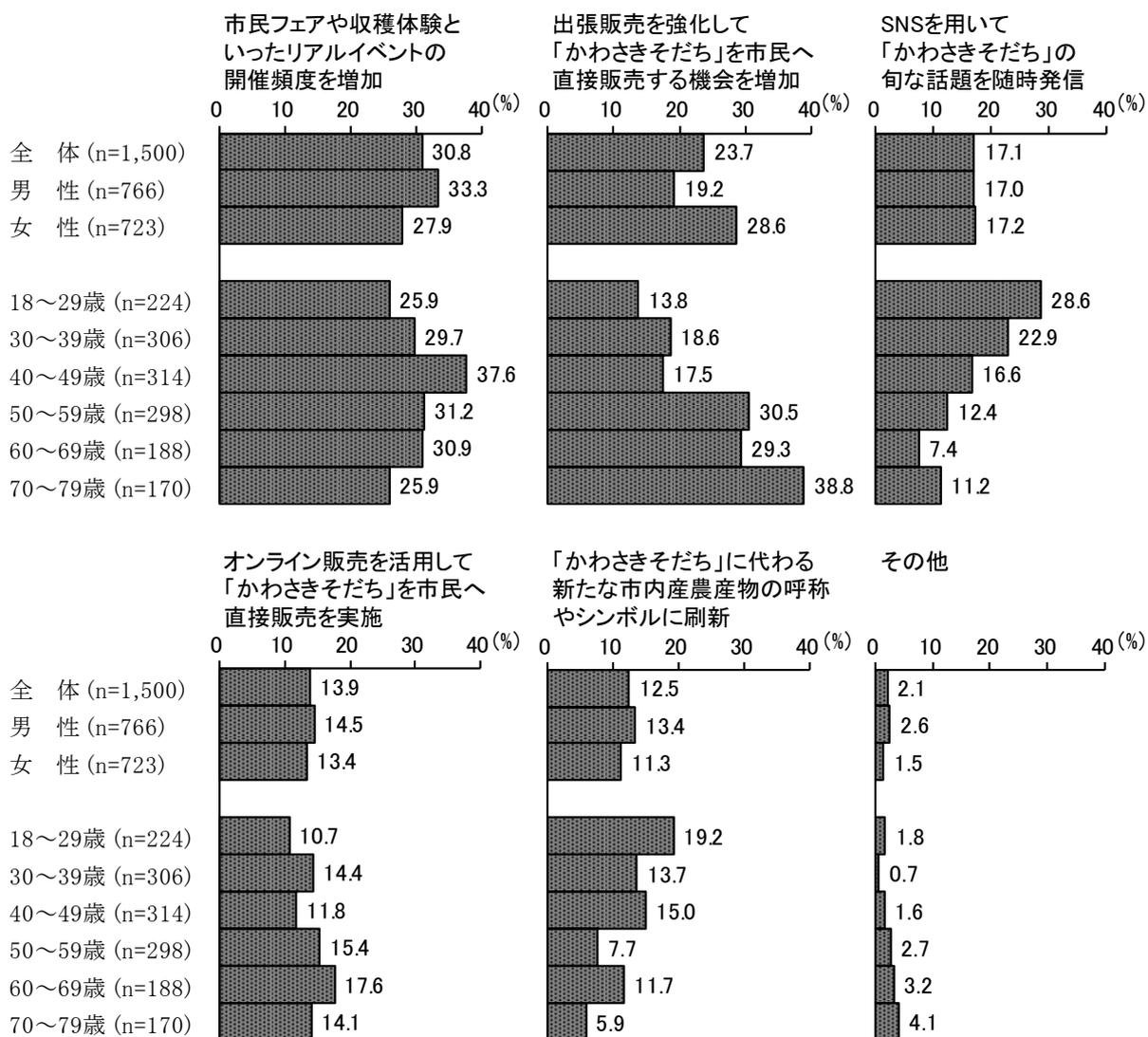
【図表 35】「かわさきの農業」の情報発信にあたり効果がありそうな方法



性別に見ると、「出張販売を強化して「かわさきそだち」を市民へ直接販売する機会を増加」は、男性よりも女性の方が9.4ポイント高く、「市民フェアや収穫体験といったリアルイベントの開催頻度を増加」は女性よりも男性の方が5.4ポイント高くなっている。

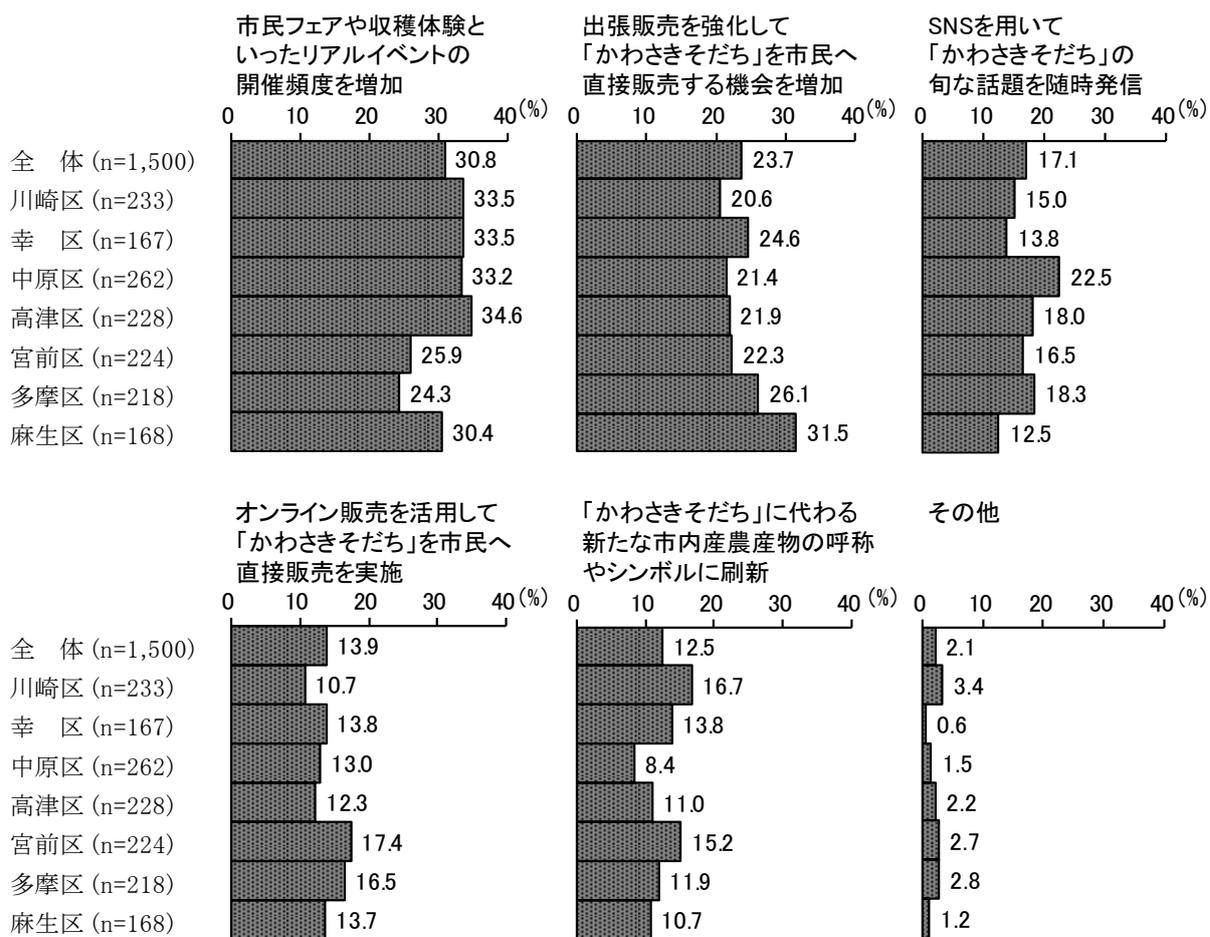
年齢別に見ると、「市民フェアや収穫体験といったリアルイベントの開催頻度を増加」は40～49歳が37.6%と最も高くなっている。また、「出張販売を強化して「かわさきそだち」を市民へ直接販売する機会を増加」は概ね年齢が上がるほど高く、「SNSを用いて「かわさきそだち」の旬な話題を随時発信」と「「かわさきそだち」に代わる新たな市内産農産物の呼称やシンボルに刷新」は概ね年齢が下がるほど高くなっている。

【図表 36】「かわさきの農業」の情報発信にあたり効果がありそうな方法
(性別、年齢別)



居住区別に見ると、「市民フェアや収穫体験といったリアルイベントの開催頻度を増加」は「宮前区」と「多摩区」で2割台と他の居住区と比べて低くなっている。また、「出張販売を強化して「かわさきそだち」を市民へ直接販売する機会を増加」は「麻生区」が最も高く、「SNSを用いて「かわさきそだち」の旬な話題を随時発信」は「中原区」が最も高い。

【図表 37】「かわさきの農業」の情報発信にあたり効果がありそうな方法
(居住区別)

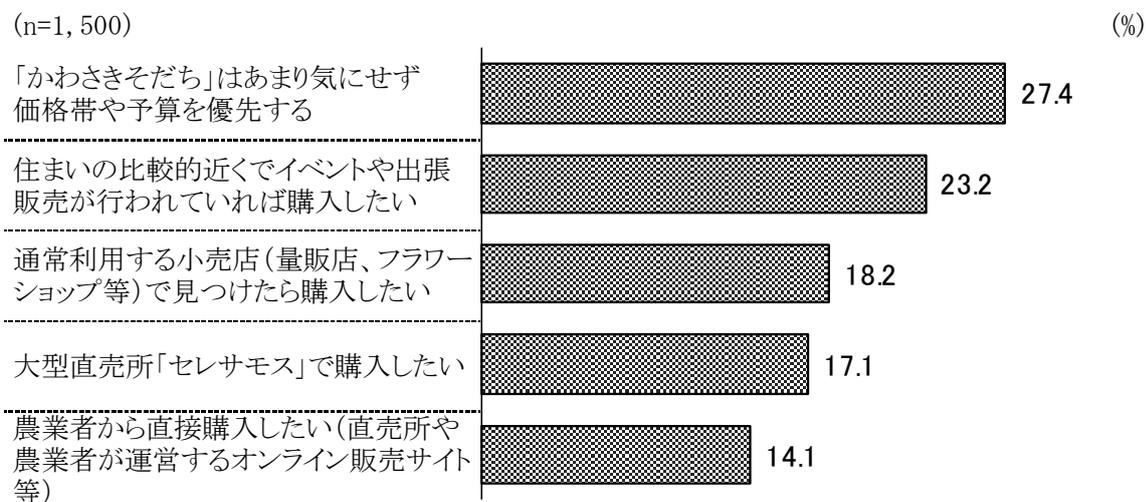


(3) 「かわさきそだち」の購入場所

Q10. あなたが「かわさきそだち」を購入するとしたら、どこで購入したいですか。

「かわさきそだち」はあまり気にせず価格帯や予算を優先する」が 27.4%と最も高く、次いで「住まいの比較的近くでイベントや出張販売が行われていれば購入したい」(23.2%)、「通常利用する小売店(量販店、フラワーショップ等)で見つけたら購入したい」(18.2%)と続いている。

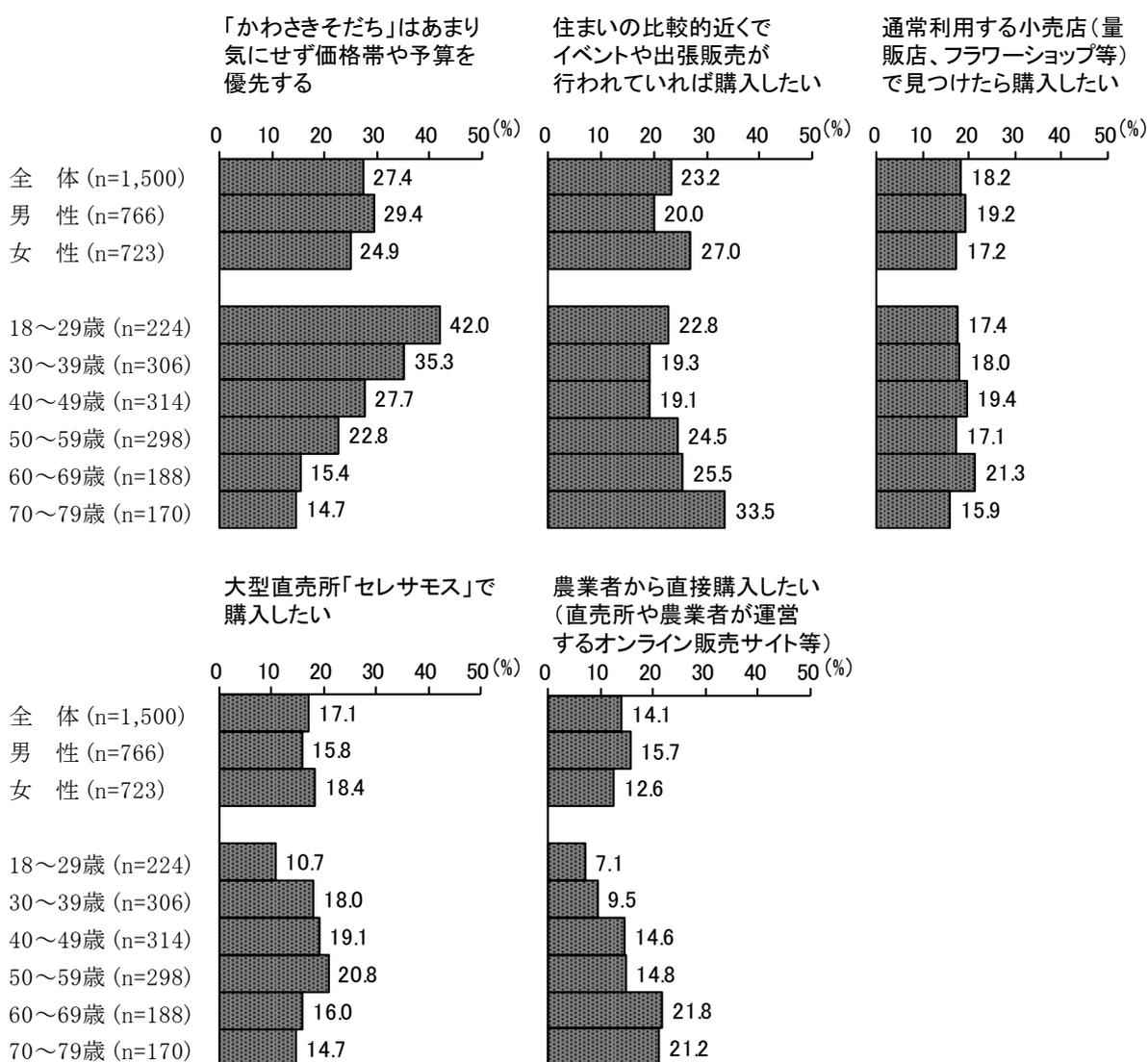
【図表 38】「かわさきそだち」の購入場所



性別に見ると、「住まいの比較的近くでイベントや出張販売が行われていれば購入したい」は、男性よりも女性の方が7.0ポイント高く、「かわさきそだち」はあまり気にせず価格帯や予算を優先する」は女性よりも男性の方が4.5ポイント高くなっている。

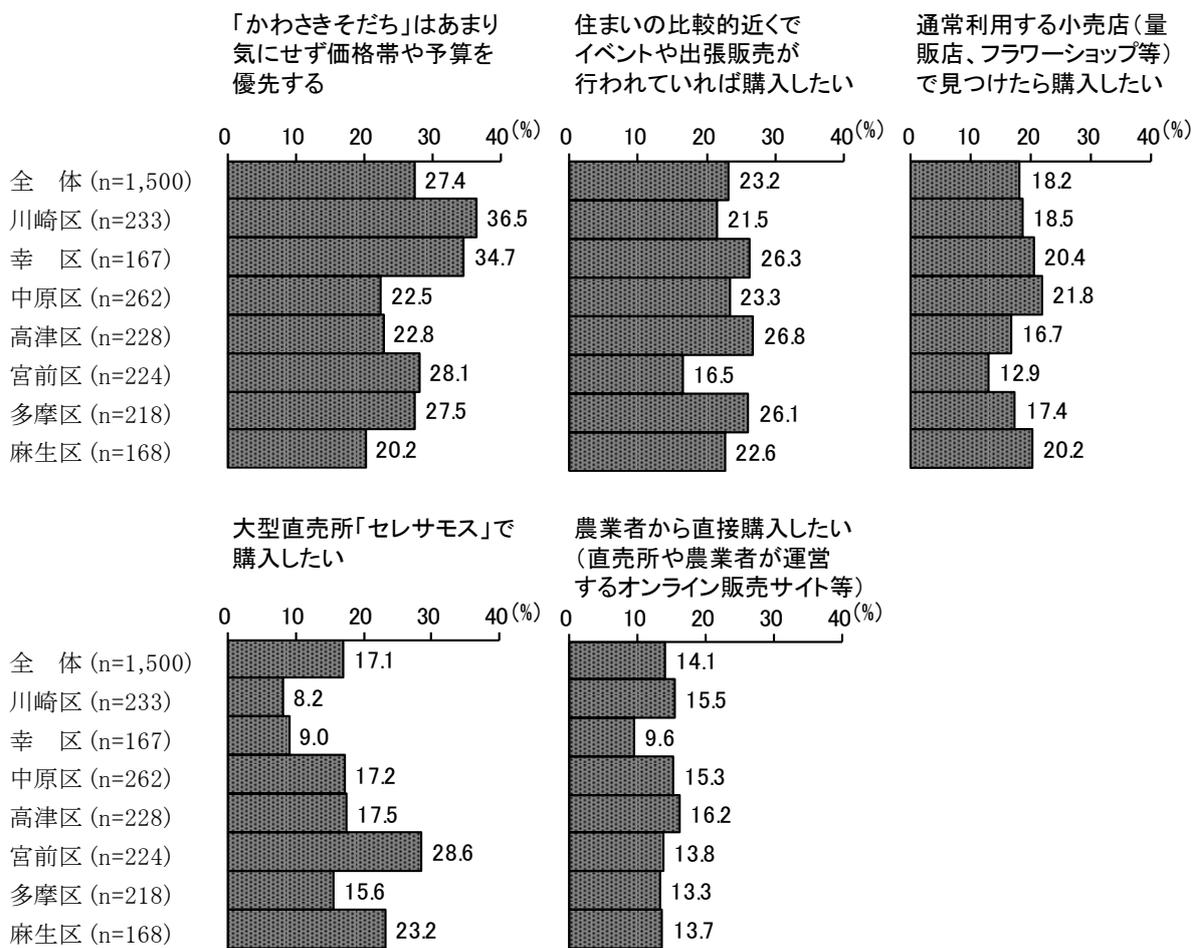
年齢別に見ると、「かわさきそだち」はあまり気にせず価格帯や予算を優先する」は年齢が下がるほど高く、「農業者から直接購入したい（直売所や農業者が運営するオンライン販売サイト等）」は概ね年齢が上がるほど高くなっている。また、「住まいの比較的近くでイベントや出張販売が行われていれば購入したい」は70～79歳が3割を超えて最も高い。

【図表 39】「かわさきそだち」の購入場所
(性別、年齢別)



居住区別に見ると、「かわさきそだち」はあまり気にせず価格帯や予算を優先するは「川崎区」と「幸区」が3割を超えて高く、「大型直売所「セレスアモス」で購入したい」は「セレスアモス」の所在地である「宮前区」と「麻生区」で2割台と高くなっている。また、「住まいの比較的近くでイベントや出張販売が行われていれば購入したい」は「宮前区」が他の居住区と比べて低く、「農業者から直接購入したい（直売所や農業者が運営するオンライン販売サイト等）」は「幸区」が他の居住地と比べて低くなっている。

【図表 40】「かわさきそだち」の購入場所
(居住区別)

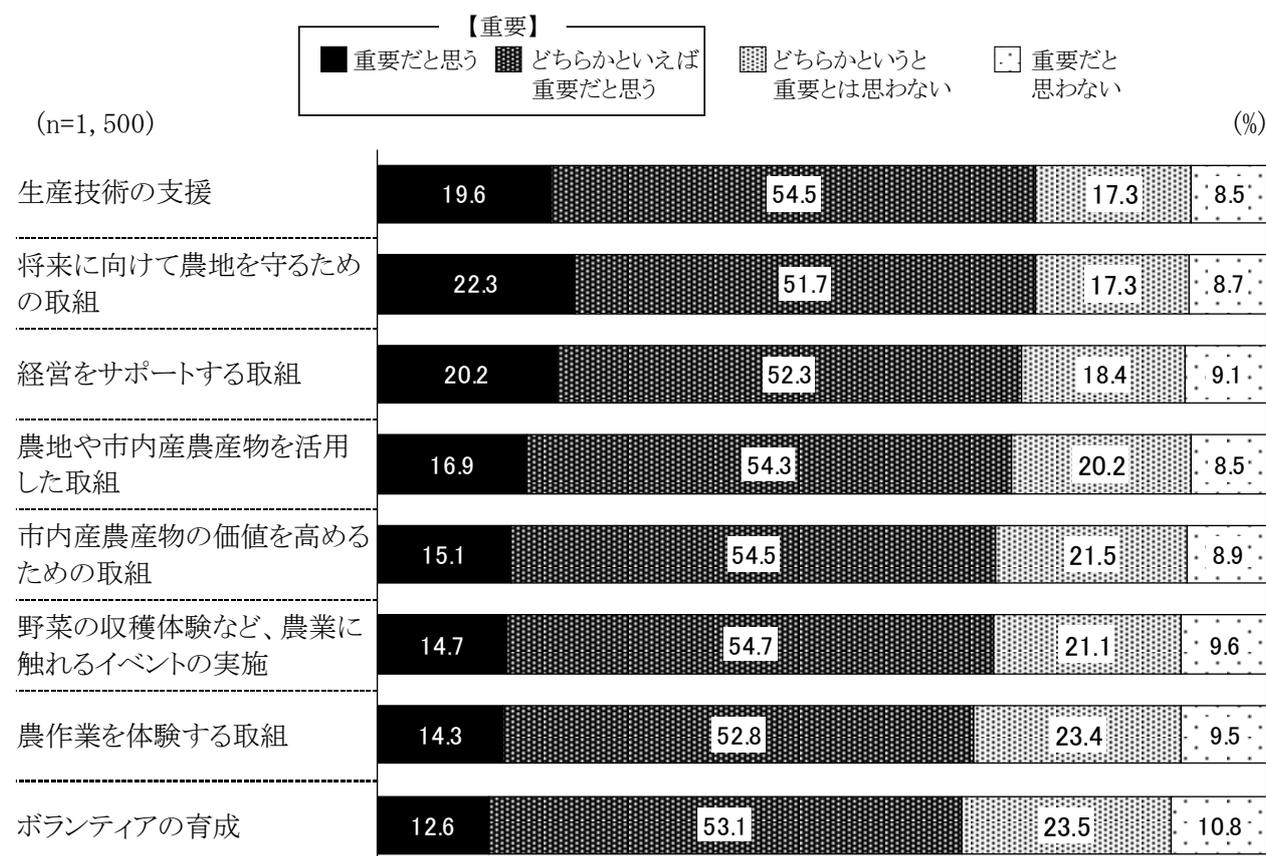


(4) 川崎市の「農業」に対する取組の重要度

Q11. 次の川崎市の「農業」に対する取組はどの程度重要だと思いますか。それぞれの項目ごとにあてはまるものを1つずつ選んでください。

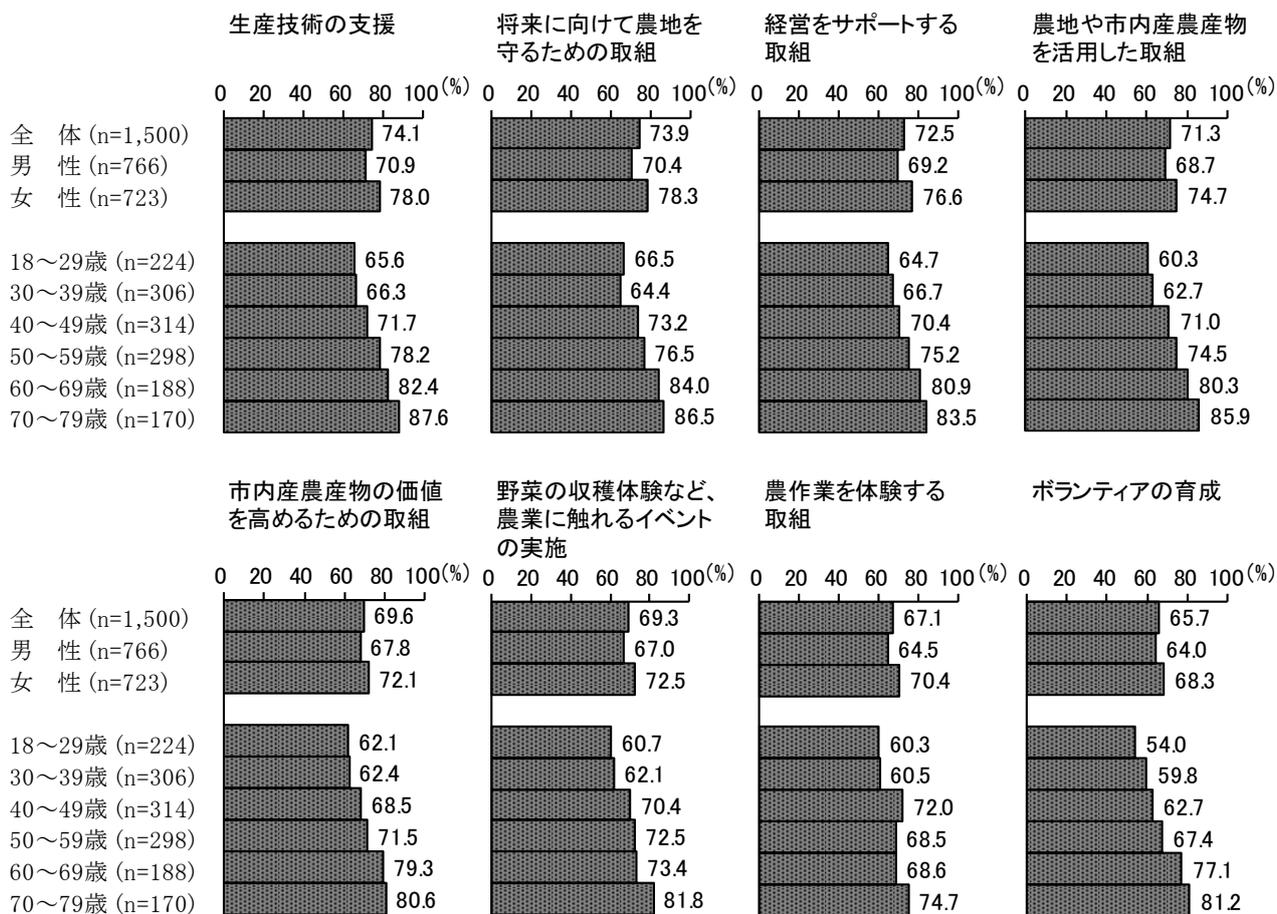
「重要だと思う」と「どちらかといえば重要だと思う」を合計した【重要】は、「生産技術の支援（野菜や果実、花の栽培に関する試験研究や農業者への技術指導）」（74.1%）が最も高く、次いで「将来に向けて農地を守るための取組（「生産緑地地区」の指定や農地の貸借の促進など農地を残していく取組）」（73.9%）、「経営をサポートする取組（農作業を効率化したり、生産量を増やすためのハウスや設備導入の支援）」（72.5%）、「農地や市内産農産物を活用した取組（学校給食などを通じた「食農教育」、「福祉農園」としての農園活用）」（71.3%）と、ここまでが7割を超えている。

【図表 41】川崎市の「農業」に対する取組の重要度



性別に見ると、【重要】の割合は、全ての項目で男性よりも女性の方が高くなっている。
 年齢別に見ると、【重要】の割合は、全ての項目で概ね年齢が上がるほど高くなっている。

【図表 42】川崎市の「農業」に対する取組の重要度（【重要】回答者）
 （性別、年齢別）



1.3 地域における多文化共生に関する意識について

(1) 外国人市民と共に暮らすことが身近になっていると感じる程度

Q12. あなたは、自分の暮らす地域で外国人市民と共に暮らすことが身近になってきていると感じますか。

「そう思う」(16.4%)と「どちらかと言えばそう思う」(45.6%)を合計した【そう思う】の割合は62.0%と、6割を超えている。

【図表 43】外国人市民と共に暮らすことが身近になっていると感じる程度

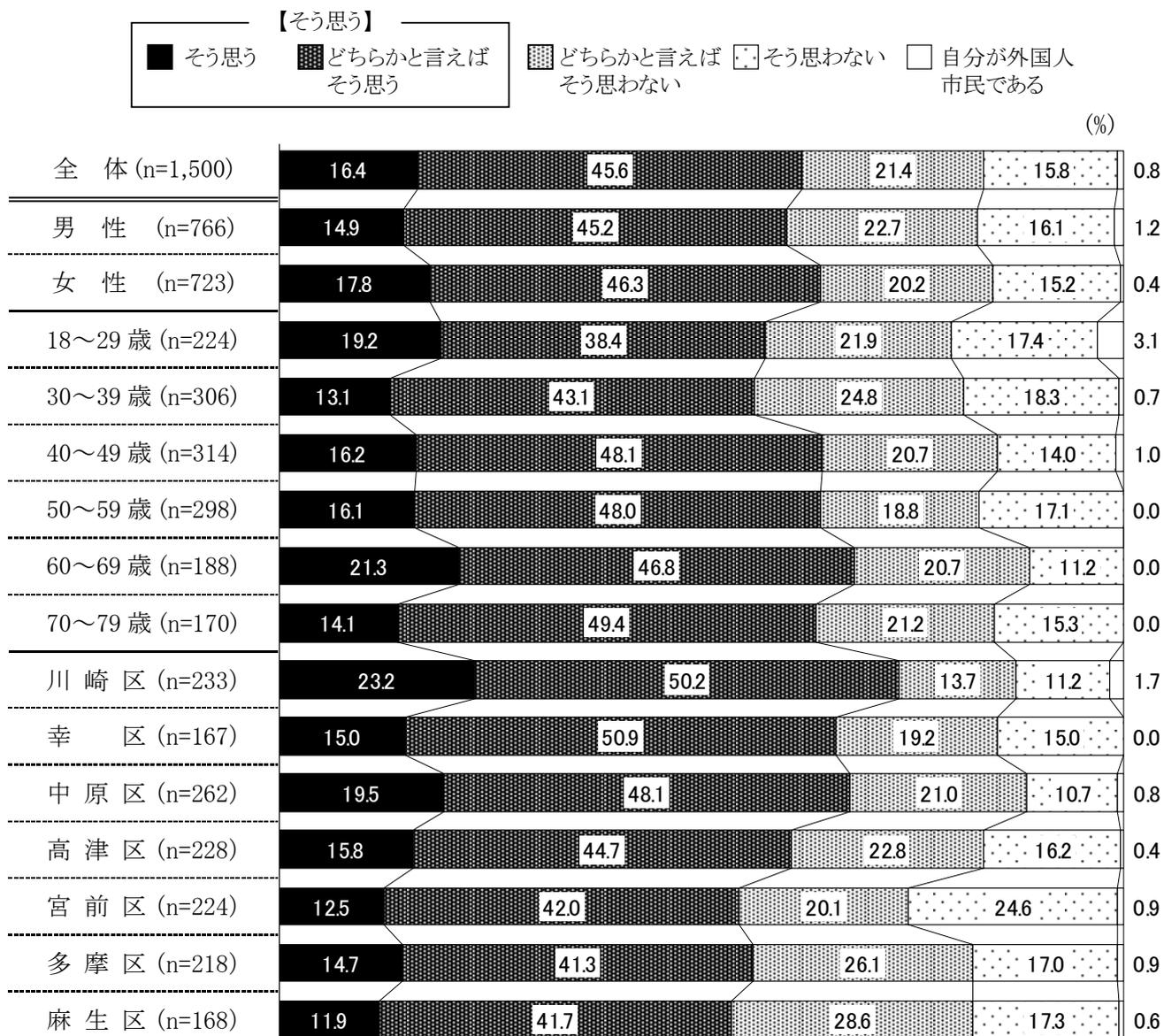


性別に見ると、「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」を合計した【そう思う】の割合は、男性よりも女性の方が4.1ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、【そう思う】の割合は40歳代以上で6割を超え、60～69歳（68.1%）が最も高い。

居住区別に見ると、【そう思う】の割合は「川崎区」が73.4%と最も高く、次いで「中原区」（67.6%）、「幸区」（65.9%）と続いている。一方、「宮前区」、「多摩区」、「麻生区」は5割台であった。

【図表 44】外国人市民と共に暮らすことが身近になっていると感じる程度
(性別、年齢別、居住区別)

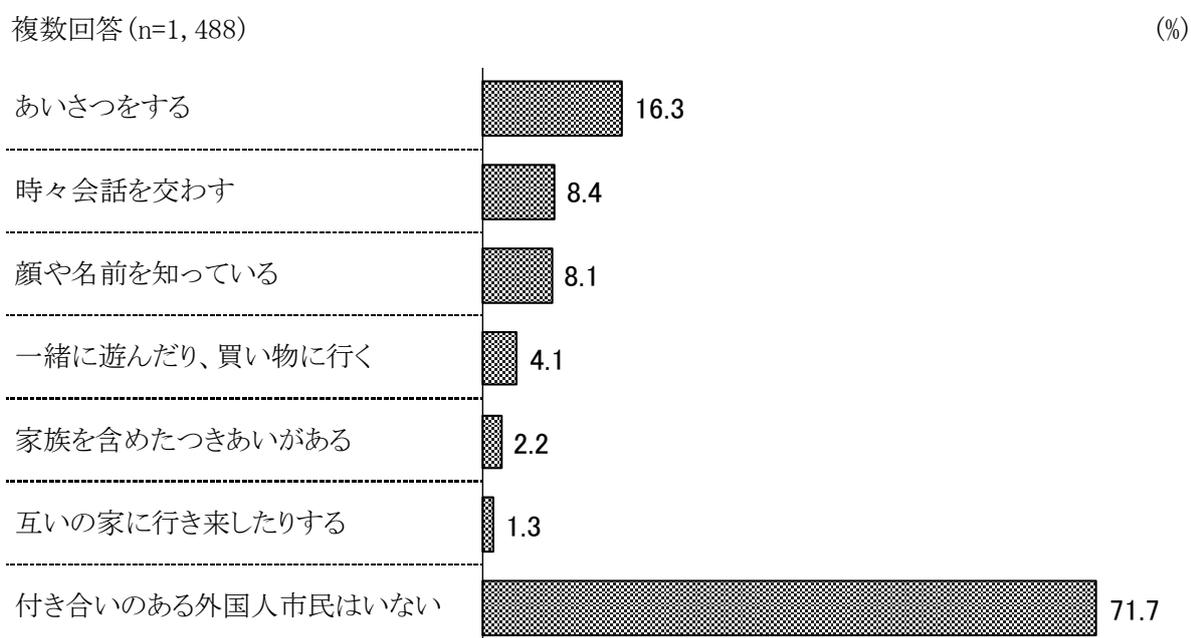


(2) 地域での外国人市民とのつきあいについて

Q13. あなたは、ふだん地域で生活する中で次のようなつきあいのある外国人市民はいますか。

「付き合いのある外国人市民はいない」が 71.7%と7割を超えている。付き合いのある場合では、「あいさつをする」(16.3%)が最も高く、次いで「時々会話を交わす」(8.4%)、「顔や名前を知っている」(8.1%)と続いている。

【図表 45】地域での外国人市民とのつきあいについて（複数回答）

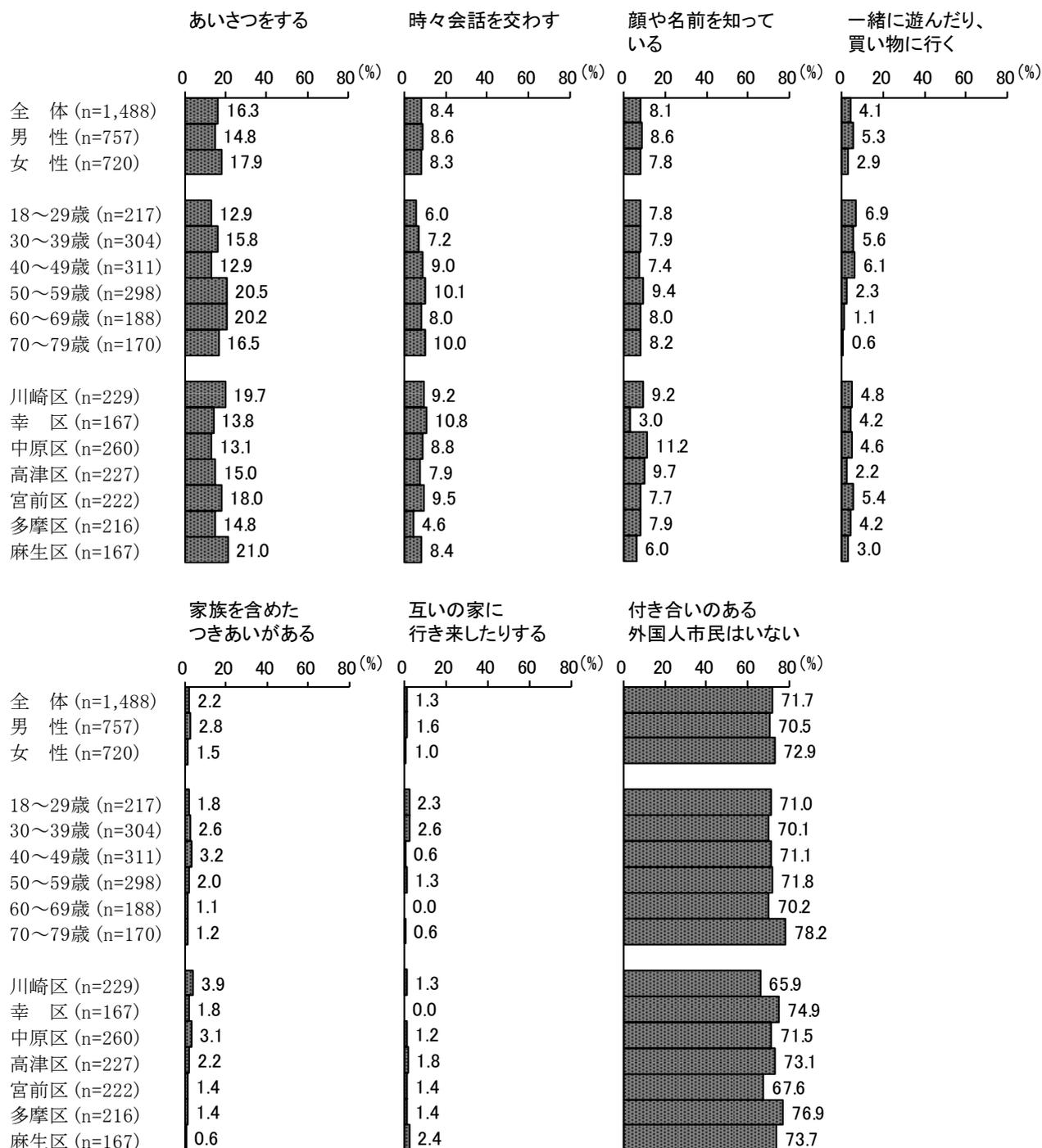


性別では傾向に大きな差は見られない。

年齢別に見ると、「あいさつをする」の割合は50～59歳と60～69歳が約2割と他の年齢層と比べてやや高く、「一緒に遊んだり、買い物に行く」は40歳代以下でやや高い傾向がある。また、「付き合いのある外国人市民はいない」は70～79歳が78.2%と最も高い。

居住区別で見ると、「川崎区」と「宮前区」は「付き合いのある外国人市民はいない」が6割台と他の居住区と比べて低くなっている。

【図表 46】 地域での外国人市民とのつきあいについて（複数回答）
（性別、年齢別、居住区別）

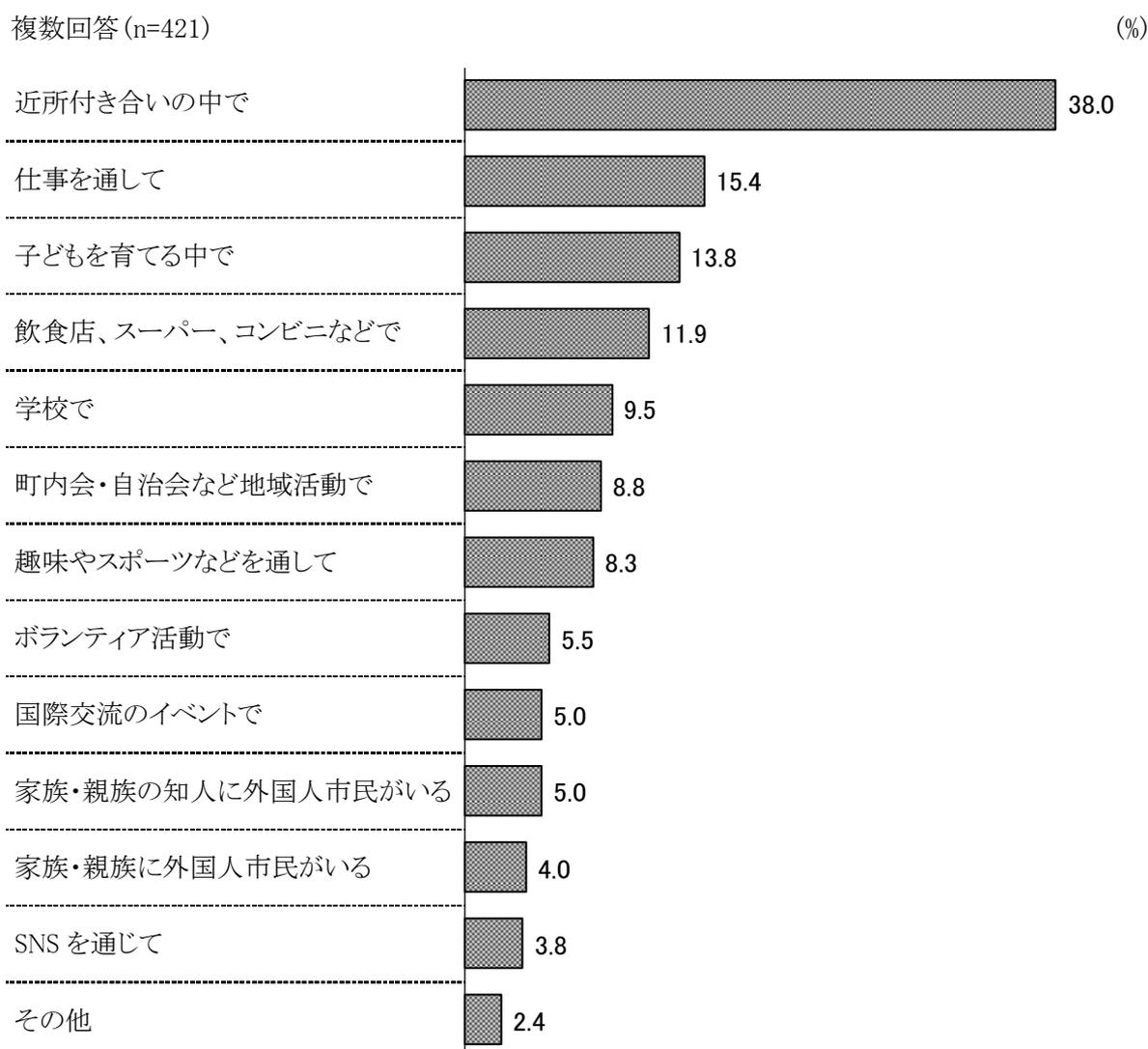


(3) 外国人市民と知り合ったきっかけ

Q14. 地域で付き合いのある外国人市民とどうやって知り合いましたか。

外国人市民と付き合いのある人に、知り合ったきっかけについてたずねたところ、「近所付き合いの中で」が 38.0%と最も高く、次いで「仕事を通して」(15.4%)、「子どもを育てる中で」(13.8%)、「飲食店、スーパー、コンビニなどで」(11.9%)と続いている。

【図表 47】外国人市民と知り合ったきっかけ（複数回答）

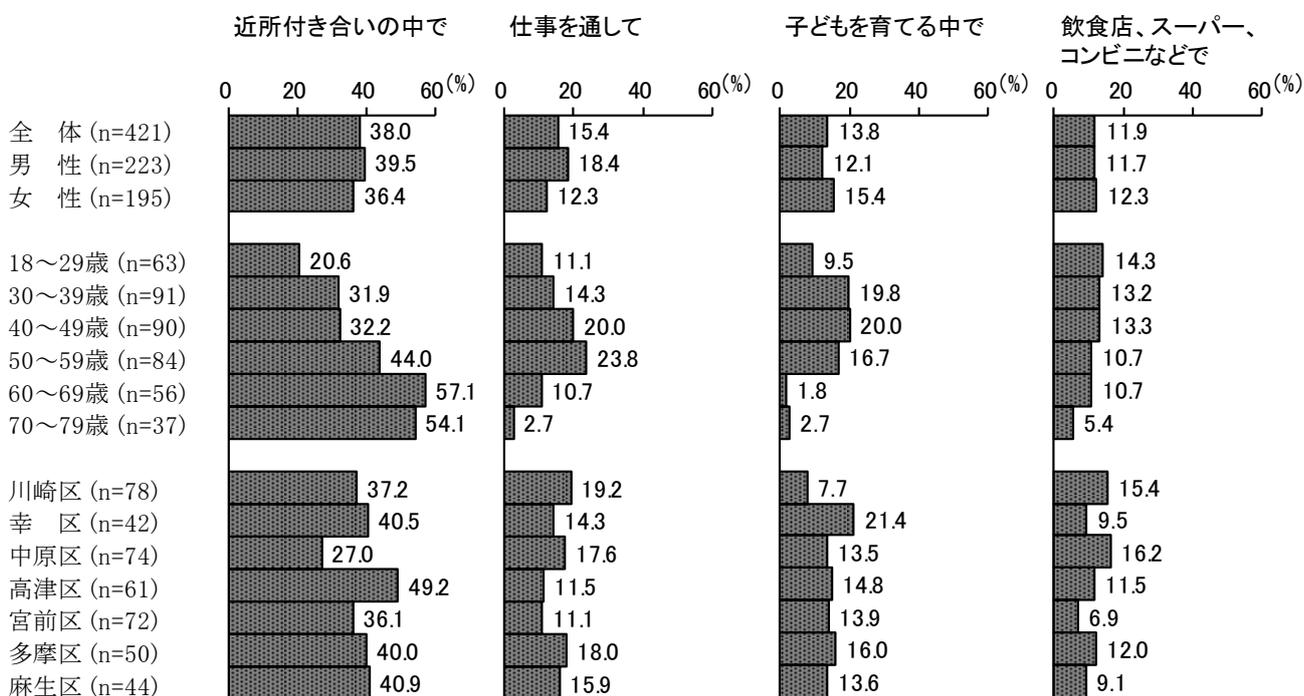


性別に見ると、「仕事を通して」は女性よりも男性の方が6.1ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、「近所付き合いの中で」の割合は概ね年齢が上がるほど高く、60歳代以上が5割を超えている。また、「仕事を通して」は50～59歳が23.8%と最も高い。「子どもを育てる中で」は30～39歳、40～49歳、50～59歳が他の年齢層と比べて高くなっている。

居住区別で見ると、「近所付き合いの中で」は「高津区」(49.2%)が最も高く、「仕事を通して」は「川崎区」(19.2%)が最も高くなっている。また、「子どもを育てる中で」は「幸区」(21.4%)が最も高い。

【図表 48】外国人市民と知り合ったきっかけ(複数回答) <<上位4項目>>
(性別、年齢別、居住区別)

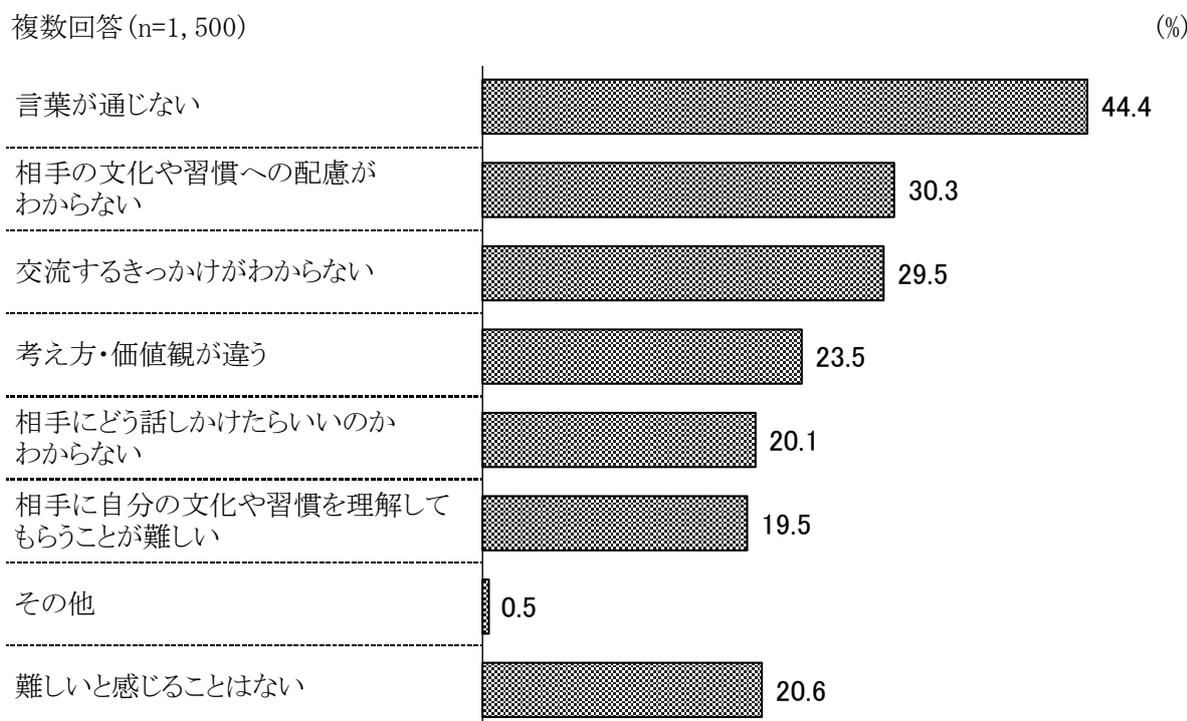


(4) 国籍の異なる市民との交流で難しいと思ったこと

Q15. あなたは、国籍の異なる市民との交流でこれまでに難しいと思ったこと、または今後交流するにあたり難しいと感じていることはありますか。

「言葉が通じない」が 44.4%と最も高く、次いで「相手の文化や習慣への配慮がわからない」(30.3%)、「交流するきっかけがわからない」(29.5%)、「考え方・価値観が違う」(23.5%)と続いている。一方、「難しいと感じることはない」(20.6%)との回答も2割ほど見られた。

【図表 49】 国籍の異なる市民との交流で難しいと思ったこと（複数回答）

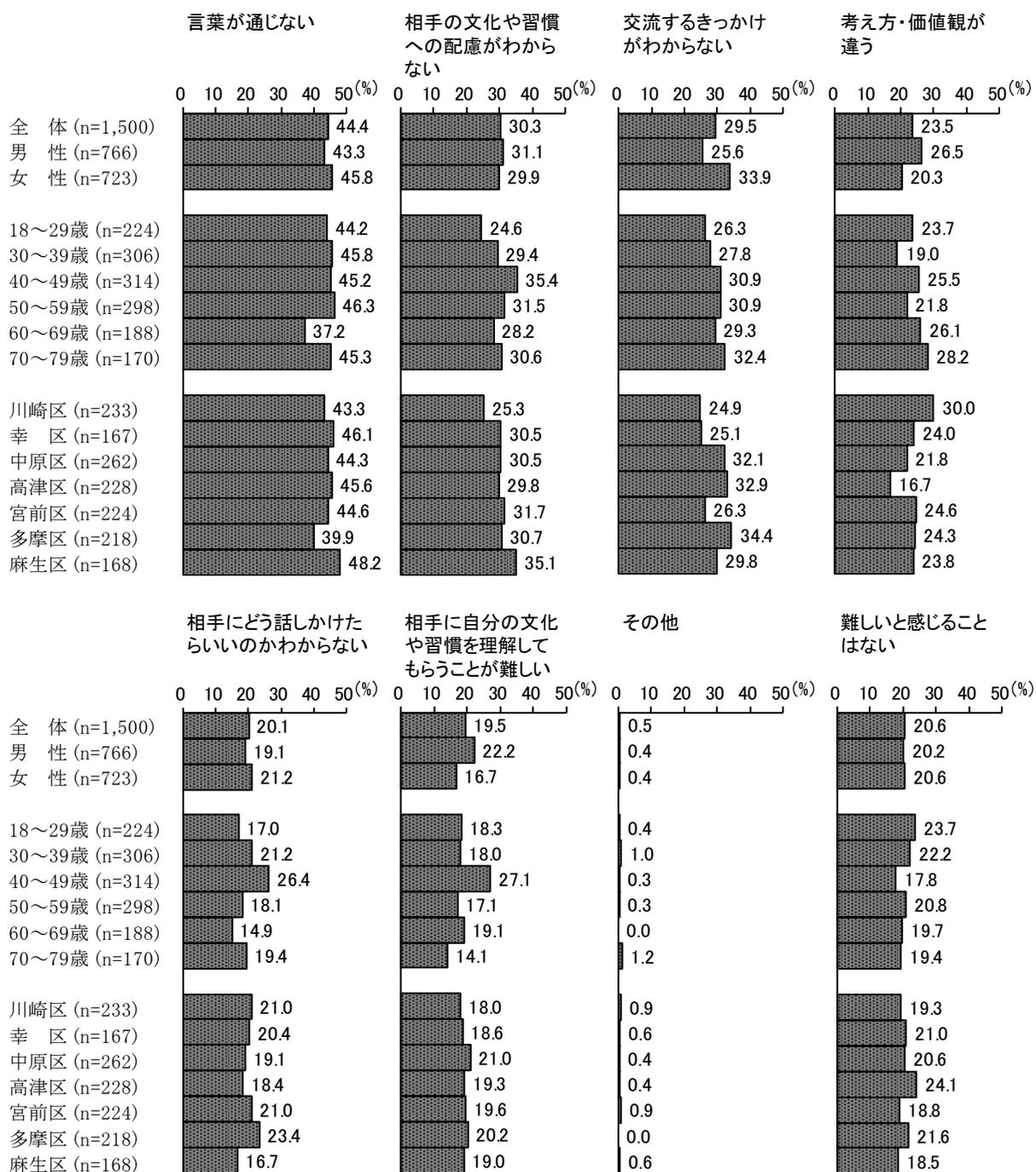


性別に見ると、「交流するきっかけがわからない」は男性よりも女性の方が8.3ポイント高く、「考え方・価値観が違う」と「相手に自分の文化や習慣を理解してもらうことが難しい」は女性よりも男性の方が5ポイント以上高くなっている。

年齢別に見ると、「言葉が通じない」の割合は60～69歳が37.2%と他の年齢層と比べて低くなっている。また、「相手の文化や習慣への配慮がわからない」、「相手にどう話しかけたらいいのかわからない」、「相手に自分の文化や習慣を理解してもらうことが難しい」の3項目は40～49歳が最も高くなっている。

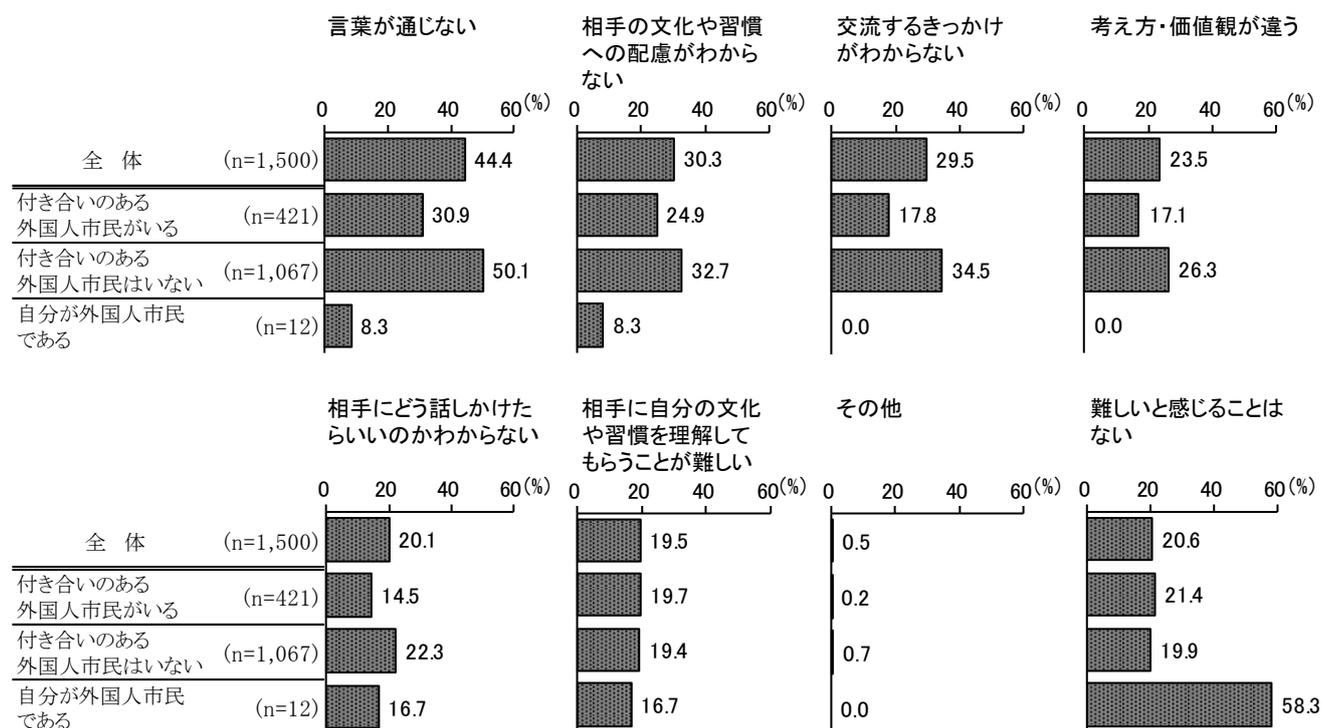
居住区別に見ると、「言葉が通じない」と「相手の文化や習慣への配慮がわからない」は「麻生区」が最も高く、「考え方・価値観が違う」は「川崎区」が最も高い。

【図表 50】 国籍の異なる市民との交流で難しいと思ったこと（複数回答）
（性別、年齢別、居住区別）



Q13 の回答結果から、外国人市民と付き合いのある人と付き合いのない人に分け、それぞれについて見ると、「相手に自分の文化や習慣を理解してもらおうことが難しい」、「難しいと感じることはない」を除いた項目で付き合いのある外国人市民がいる人よりもない人の方が高くなっており、特に「言葉が通じない」は 19.2 ポイント、「交流するきっかけがわからない」は 16.7 ポイント、付き合いのある外国人市民がいない人の方が高くなっている。

【図表 51】 国籍の異なる市民との交流で難しいと思ったこと（複数回答）
（付き合いのある外国人市民の有無別）

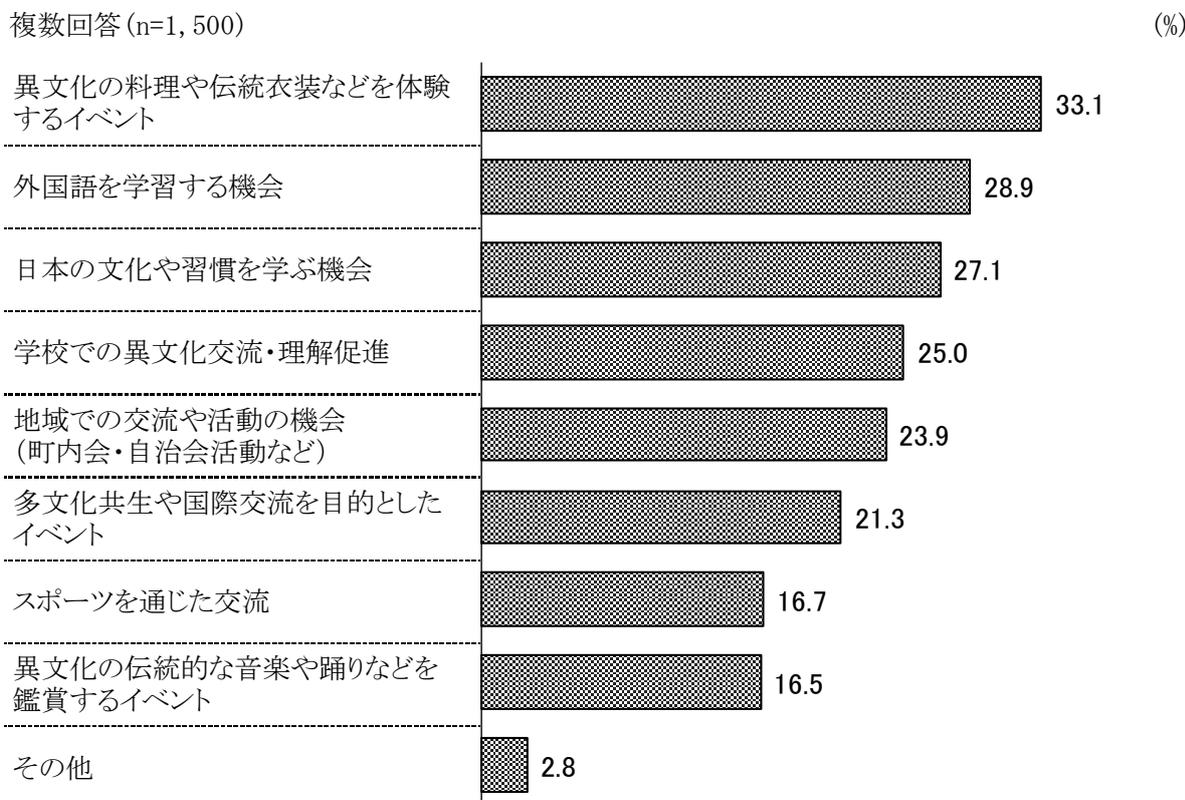


(5) 国籍の異なる市民との相互理解を深めるためにあるとよい機会

Q16. 国籍の異なる市民との相互理解を深めるためにどのような機会があればよいと思いますか。

「異文化の料理や伝統衣装などを体験するイベント」が 33.1%と最も高く、次いで「外国語を学習する機会」(28.9%)、「日本の文化や習慣を学ぶ機会」(27.1%)、「学校での異文化交流・理解促進」(25.0%)と続いている。

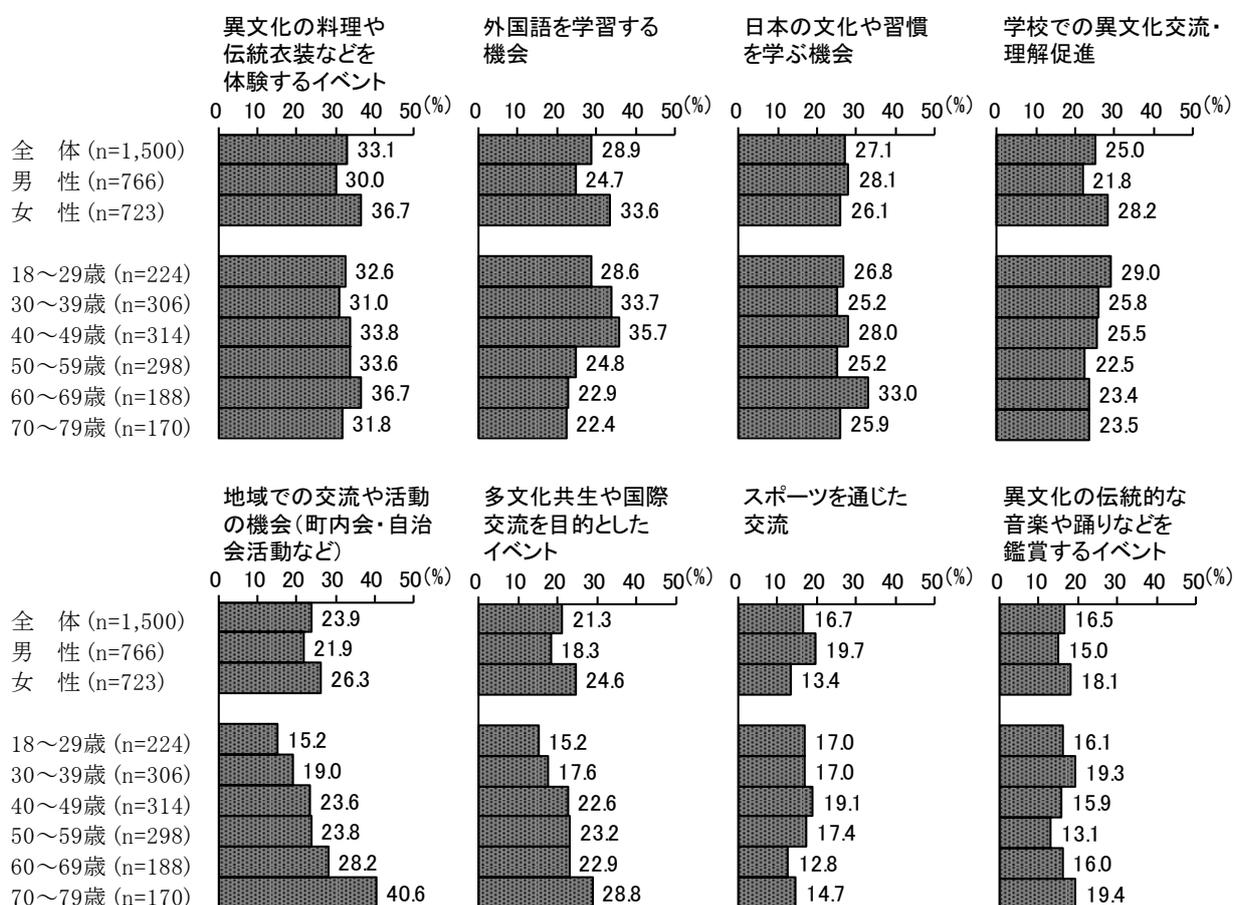
【図表 52】 国籍の異なる市民との相互理解を深めるためにあるとよい機会（複数回答）



性別に見ると、「スポーツを通じた交流」は女性よりも男性の方が6.3ポイント高く、「外国語を学習する機会」、「異文化の料理や伝統衣装などを体験するイベント」、「学校での異文化交流・理解促進」、「多文化共生や国際交流を目的としたイベント」の4項目は男性よりも女性の方が5ポイント以上高くなっている。

年齢別に見ると、「外国語を学習する機会」は30～39歳と40～49歳が3割を超えて高く、「学校での異文化交流・理解促進」は概ね年齢が下がるほど高くなっている。また、「地域での交流や活動の機会（町内会・自治会活動など）」と「多文化共生や国際交流を目的としたイベント」は概ね年齢が上がるほど割合が高くなっている。

【図表 53】 国籍の異なる市民との相互理解を深めるためにあるとよい機会（複数回答）《上位8項目》
（性別、年齢別）

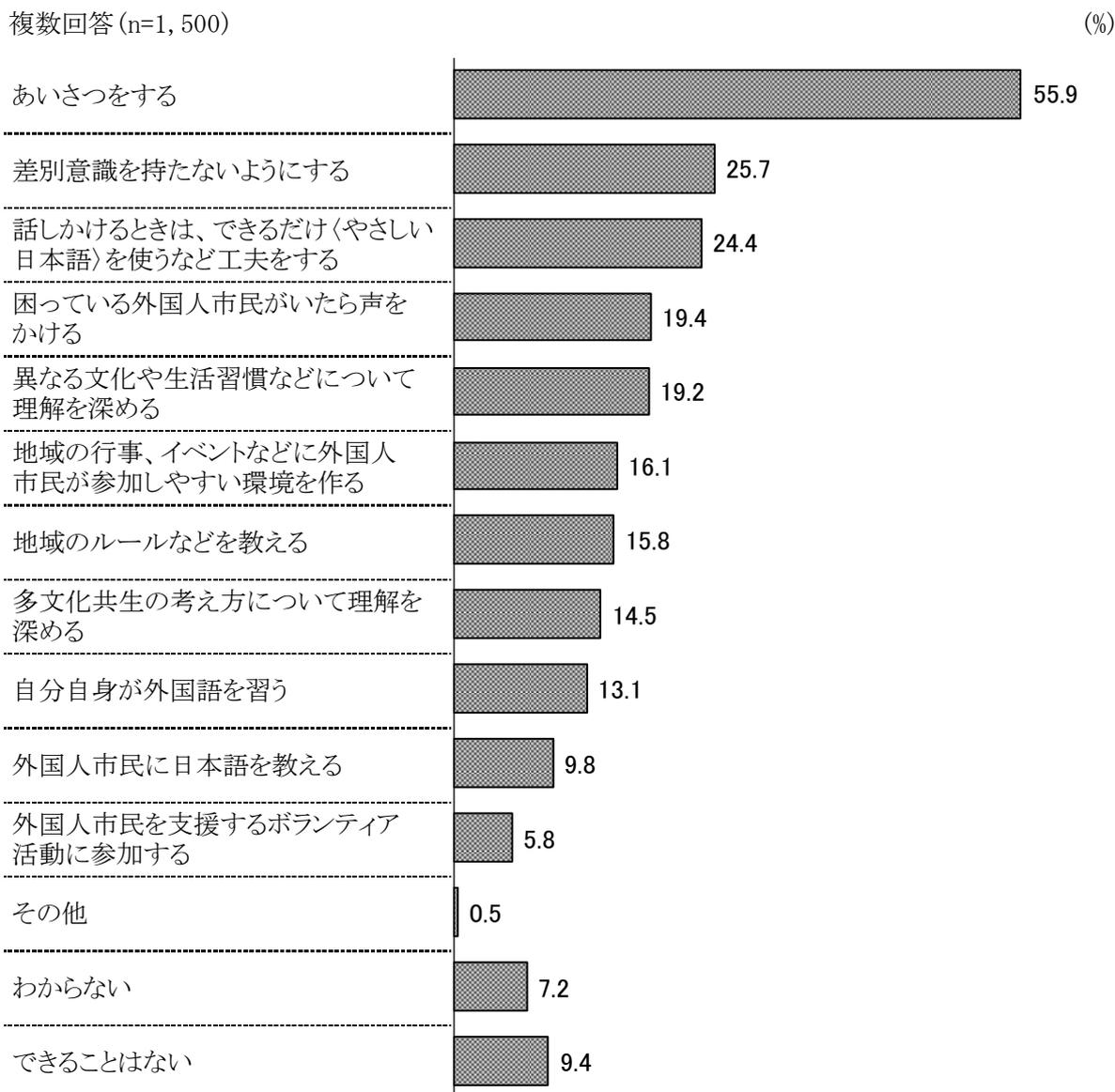


(6) 国籍の異なる市民が地域で相互理解を深めるためにできること

Q17. 国籍の異なる市民が地域で相互理解を深めるためにあなたができることは何ですか。

「あいさつをする」が 55.9%と最も高く、次いで「差別意識を持たないようにする」(25.7%)、「話しかけるときは、できるだけ〈やさしい日本語〉を使うなど工夫をする」(24.4%)、「困っている外国人市民がいたら声をかける」(19.4%)と続いている。

【図表 54】 国籍の異なる市民が地域で相互理解を深めるためにできること (複数回答)

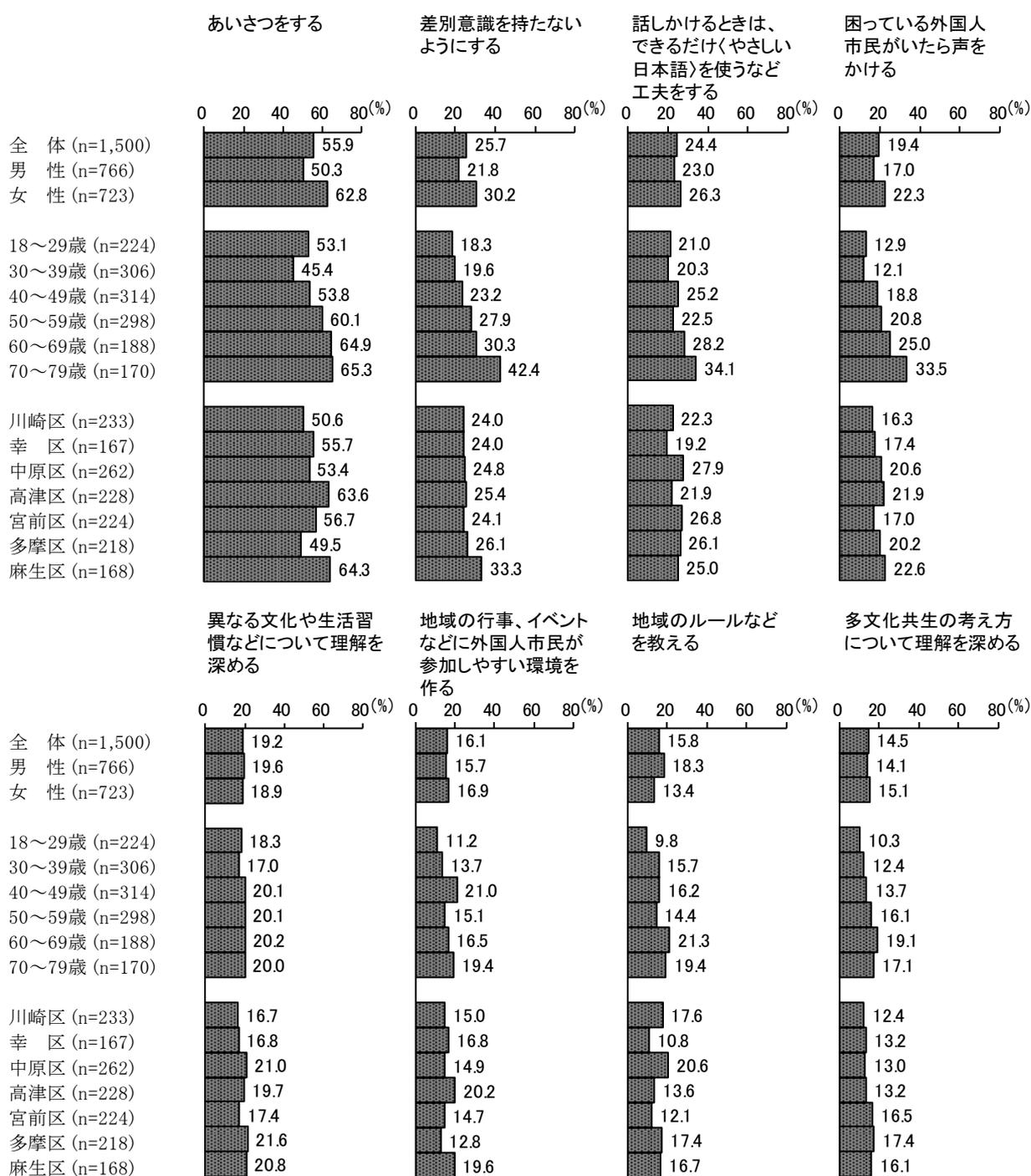


性別に見ると、「あいさつをする」、「差別意識を持たないようにする」、「困っている外国人市民がいたら声をかける」の3項目は男性よりも女性の方が5ポイント以上高くなっている。

年齢別に見ると、「あいさつをする」、「差別意識を持たないようにする」、「話しかけるときは、できるだけ〈やさしい日本語〉を使うなど工夫をする」、「困っている外国人市民がいたら声をかける」の4項目は概ね年齢が上がるほど高くなっている。

居住区別で見ると、「あいさつをする」は「高津区」(63.6%)と「麻生区」(64.3%)が6割を超えて高くなっている。

【図表 55】国籍の異なる市民が地域で相互理解を深めるためにできること(複数回答)《上位8項目》
(性別、年齢別、居住区別)

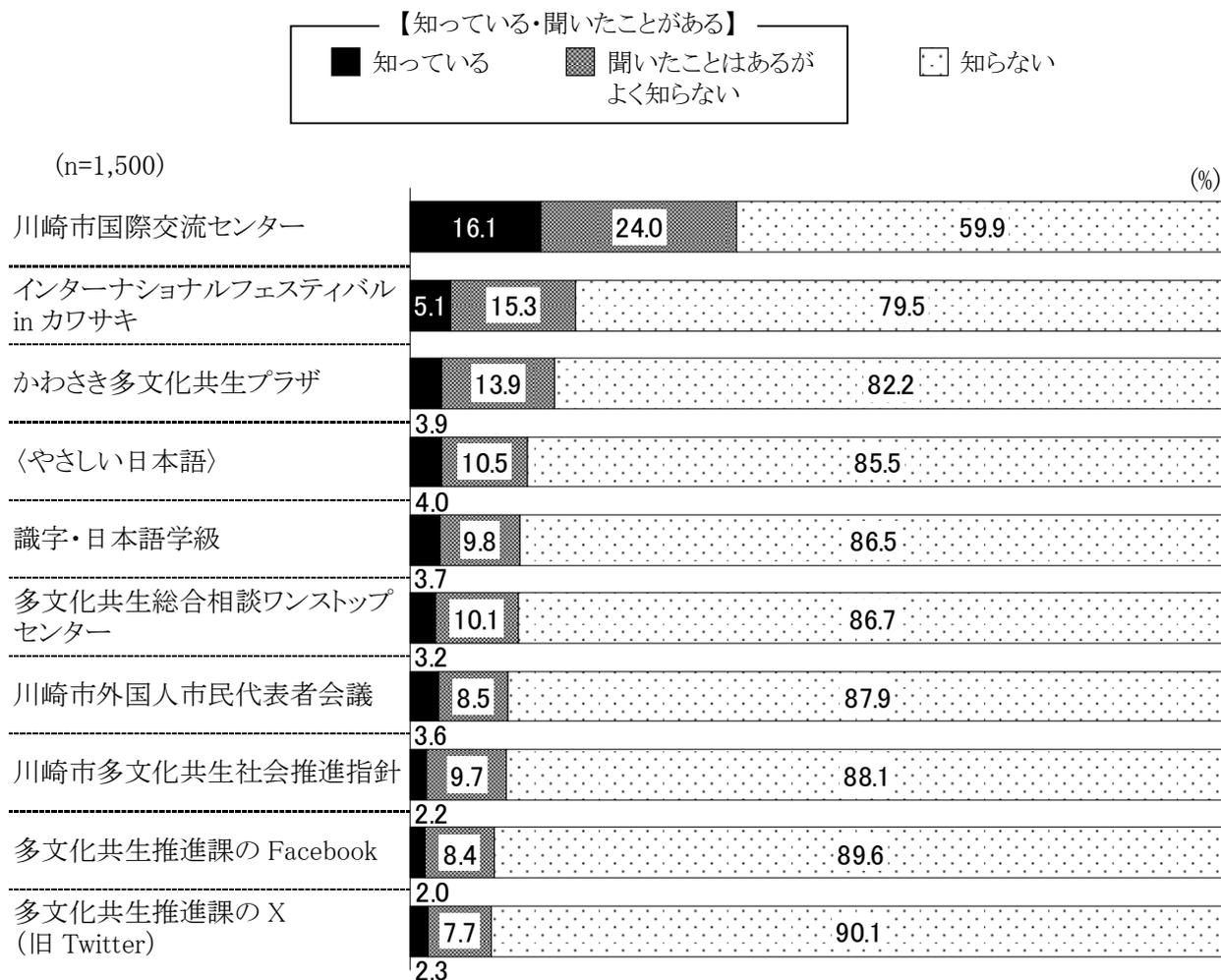


(7) 川崎市の多文化共生に関する施設・取組の認知状況

Q18. あなたは次のような川崎市の施設や取組を知っていますか。

「知っている」と「聞いたことはあるがよく知らない」を合計した【知っている・聞いたことがある】は「川崎市国際交流センター（中原区にある国際交流を目的とした施設。ホールや会議室を利用できるほか、国際交流、多文化共生に関する各種講座やイベントが開かれている）」が40.1%と最も高く、次いで「インターナショナルフェスティバル in カワサキ（川崎市国際交流センターで活動している民間交流団体などが一堂に会し、展示やステージ、交流体験などができるイベント）」(20.5%)、「かわさき多文化共生プラザ（2024年7月にオープンした川崎市役所第3庁舎にある多言語の相談窓口。来所のほか、電話やフォーム、オンラインでも相談を受け付けている）」(17.8%)、「〈やさしい日本語〉（普通の日本語よりも簡単で外国人にもわかりやすい日本語のこと。川崎市では2021年3月に「川崎市〈やさしい日本語〉ガイドライン」を策定した）」(14.5%)と続いている。

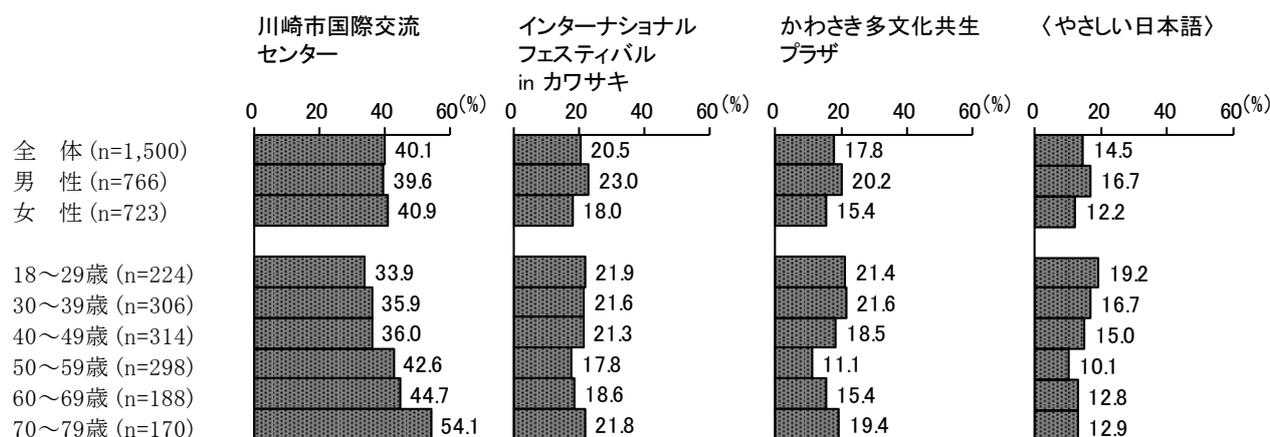
【図表 56】 川崎市の多文化共生に関する施設・取組の認知状況



【知っている・聞いたことがある】と回答した割合を性別に見ると、女性よりも男性の方が「インターナショナルフェスティバル in カワサキ」は 5.0 ポイント、「かわさき多文化共生プラザ」は 4.8 ポイント、「〈やさしい日本語〉」は 4.5 ポイント高くなっている。

年齢別に見ると、「川崎市国際交流センター」は年齢が上がるほど高く、その他の3項目では 50～59 歳が最も低くなっている。

【図表 57】川崎市の多文化共生に関する施設・取組の認知状況
 (【知っている・聞いたことがある】回答者) <<上位4項目>>
 (性別、年齢別)



Q13 の回答結果から、外国人市民と付き合いのある人と付き合いのない人に分け、それぞれについて見ると、【知っている・聞いたことがある】の割合は、4項目とも付き合いのある外国人市民がいる人の方が 15 ポイント以上高くなっている。

【図表 58】川崎市の多文化共生に関する施設・取組の認知状況
 (【知っている・聞いたことがある】回答者) <<上位4項目>>
 (付き合いのある外国人市民の有無別)

